

茨城県教育財団文化財調査報告第455集

取手市

米田水塚群第1号塚

一級河川北浦川河川改修事業
地内埋蔵文化財調査報告書

令和3年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第455集

取手市

よねだみづかぐんだいいちごうつか
米田水塚群第1号塚

一級河川北浦川河川改修事業
地内埋蔵文化財調査報告書

令和3年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県竜ヶ崎工事事務所による一級河川北浦川河川改修事業に伴って実施した、米田水塚群第1号塚の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、江戸時代から明治時代にかけての水塚や礎石建物跡が確認でき、防災遺構としての水塚における基礎構造の一端が明らかになりました。本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県竜ヶ崎工事事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、取手市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理 事 長 柴 原 宏 一

例　　言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成 29 年度に発掘調査を実施した、よねだみづかぐんじいいちごうつか 茨城県取手市米田字往還東側 219 番地 1 ほかに所在する米田水塚群第 1 号塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 29 年 4 月 1 日～ 4 月 30 日
整理 令和 3 年 1 月 4 日～ 2 月 28 日
- 3 発掘調査は、副参事兼調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 駒澤 悅郎
次席調査員 内堀 団
調査員 宮内 良隆
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長小林和彦のもと、首席調査員齋藤貴穂が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、米田水塚群第 1 号塚出土の陶磁器類については、水戸市立博物館長関口慶久氏に御指導いただいた内容を参考にして執筆した。
- 6 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターにて保管されている。

凡　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 9,440 m, Y = + 24,480 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系（測地成果 2011）による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j、西から東へ 1, 2, 3, …0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット SB - 磁石建物跡 SK - 土坑 TM - 水塚
土層解説 ローム - ロームブロック 粘土 - 粘土ブロック 粘 - 粘性 締 - 締まり K - 搅乱
含有量 A - 多量 B - 中量 C - 少量 D - 微量 ○' - 極めて
粘性・締まり A - 強い B - 普通 C - 弱い ○' - 極めて
サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 150 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉  墨・煤  朱墨  土器  石器

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm, cm, gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物一覧の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

6 主軸方向は、遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SK 1 → SB 3 P21

欠番 SK 1

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
米田水塚群第1号塚の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	9
1 江戸時代の遺構と遺物	9
(1) 水塚（礎石建物跡を含む）	9
(2) その他の時代の遺物	27
第4節 総 括	28
写真図版	PL 1～PL 4
抄 錄	

挿 図 目 次

第1図 米田水塚群第1号塚周辺遺跡分布図	6
第2図 米田水塚群第1号塚調査区設定図	7
第3図 米田水塚群第1号塚遺構全体図	8
第4図 第1号水塚実測図(1)	10
第5図 第1号水塚実測図(2)	11・12
第6図 第1号水塚出土遺物実測図(1)	13
第7図 第1号水塚出土遺物実測図(2)	14
第8図 第1号礎石建物跡実測図(1)	16
第9図 第1号礎石建物跡実測図(2)	17
第10図 第1号礎石建物跡実測図(3)	18
第11図 第1号礎石建物跡出土遺物実測図(1)	19
第12図 第1号礎石建物跡出土遺物実測図(2)	20
第13図 第2号礎石建物跡実測図	22
第14図 第2号礎石建物跡出土遺物実測図	23
第15図 第3号礎石建物跡実測図	25
第16図 第3号礎石建物跡出土遺物実測図	26
第17図 その他の時代の遺物実測図(1)	27
第18図 その他の時代の遺物実測図(2)	28
第19図 取手市東部水塚分布図	30

挿 表 目 次

第1表 米田水塚群第1号塚周辺遺跡一覧	7
第2表 第1号水塚出土遺物一覧	14
第3表 第1号礎石建物跡出土遺物一覧	20
第4表 第2号礎石建物跡出土遺物一覧	24
第5表 第3号礎石建物跡出土遺物一覧	27
第6表 江戸時代礎石建物跡一覧	27
第7表 その他の時代の遺物一覧	28

写真図版目次

PL 1 第1号水塚全景(1)	PL 2 第1号礎石建物跡 土層断面
PL 1 第1号水塚全景(2)	PL 3 第2・3号礎石建物跡
PL 1 第1号水塚 土層断面(1)	PL 3 第2号礎石建物跡 遺物出土状況(1)
PL 1 第1号水塚 土層断面(2)	PL 3 第2号礎石建物跡 遺物出土状況(2)
PL 1 第1号水塚 石段	PL 3 第2号礎石建物跡 埋甕出土状況
PL 2 第1号礎石建物跡	PL 3 第2号礎石建物跡 土層断面
PL 2 第1号礎石建物跡 遺物出土状況(1)	PL 4 第1号水塚出土遺物
PL 2 第1号礎石建物跡 遺物出土状況(2)	PL 4 第1～3号礎石建物跡出土遺物
PL 2 第1号礎石建物跡 遺物出土状況(3)	

よねだみづかぐんだいいちごうつか 米田水塚群第1号塚の概要

遺跡の位置と調査の目的

米田水塚群第1号塚は、取手市の北東部を流れる北浦川右岸の標高約3mの沖積低地に位置しています。一級河川北浦川河川改修事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成29年度に511m²について発掘調査を行いました。



調査の内容

今回の調査によって、江戸時代の水塚1基、礎石建物跡3棟などを確認しました。市域は利根川とねがわと小貝川こかいがわに囲まれており、東部の低地は、昔から浸水被害に見舞われていました。水塚は、江戸時代に河川の氾濫はんらんによって引き起こる家屋への浸水被害を防ぐため、敷地内に小高く土を盛って塚を築き、水屋等を建てるこことによって、洪水時に家財道具や穀物などを守る施設です。主な遺物は、縄文土器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石器・石製品、金属製品、瓦、自然遺物などです。



米田水塚群第1号塚 調査区遠景（南西から）



第1号水塚頂部平坦面に築かれた礎石建物跡



第1号水塚の土層断面



礫や瓦片を敷き詰めた第1号礎石建物跡の根石



貝殻と黒色土を交互に突き固めた第2号礎石建物の掘方

調査の成果

水塚は江戸時代に構築されたものと考えられます。規模は長軸 30m, 短軸 10m, 高さ 2.5m ほどの四角錐台をしており、塚頂部の平坦部に礎石建物が建てられていたことがわかりました。

塚状の高まりを調査した結果、旧表土の上に氾濫原の土壤と粘土ブロックを盛土して構築していることがわかりました。また、塚頂部の礎石建物の基礎部分が確認され、土坑状と溝状に掘り込んだところに、ヤマトシジミなどの貝殻と黒色粘土が交互に突き固められていました。用いられた貝殻の中には、縄文時代後期から晩期の土器や獸骨などが含まれていたことから、周辺の貝塚から調達されたものと考えられます。特に、第1号礎石建物跡では、礎石や間知石を据えた整地層の下に根石として礫や瓦片を敷き詰め、より堅固な基礎を築いていたことがわかりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成28年11月7日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに一級河川北浦川河川改修事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成28年11月7日に現地踏査を、12月7日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成29年1月4日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に米田水塚群第1号塚が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成29年1月17日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成29年2月6日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成29年2月17日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一級河川北浦川河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成29年2月24日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、米田水塚群第1号塚について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成29年4月1日から4月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

米田水塚群第1号塚の調査は、平成29年4月1日から4月30日までの1か月間実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月		
調査表 遺構	査定 準備	備去 認		
遺構調査				
遺物洗浄 注写真	洗浄 整理			
撤収				撤収

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

米田水塚群第1号塚は、茨城県取手市米田字往還東側219番地1ほかに所在している。

取手市は、茨城県最南部に位置し、利根川を挟んで千葉県と隣接している。市の南部は利根川に沿った低地、北部は小貝川に沿った低地が広がり、それらの低地に挟まれて東西に細長く標高25mほどの北相馬台地が続いている。市街地より東側では、小文間の小台地や隣接する北相馬郡利根町の小台地が独立した台地として連なっている。市の地形形成に深く関与した常陸川や鬼怒川は、江戸時代の「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事により、群馬県利根郡みなかみ町大水上山を水源とし、関東平野を貫流する利根川と名を変えて、市の南部を西から東へ流れ、千葉県との県境を成している。小貝川は栃木県那須郡那須町八ヶ代付近を水源とし、蛇行しながら市の東部で利根川と合流している。

沖積低地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤をなしている。約2万年前の氷河期の激しい浸食により北相馬台地が削られ深い谷が形成された。さらに、約1万年前の縄文海進により古鬼怒湾が成立し、海成堆積物が堆積して埋没谷となった。埋没谷は谷底から藤代層藤代部層、藤代層河内部層といった沖積層が堆積している。低地の地表は、小貝川と鬼怒川による氾濫原となっている¹⁾。

米田水塚群第1号塚は、取手市の東部に位置し、市の北部を流れる小貝川の洪水氾濫によって土砂が堆積した北浦川右岸の標高3~4mの氾濫原に立地している。第1号塚のほかに第2・3号塚が確認されている。いずれも第1号塚から約50mほどの所にあり、第2号塚は塚のみが、第3号塚は塚と建物が現存している。調査前の現況は、宅地である。

第2節 歴史的環境

米田水塚群第1号塚が所在する取手市は、大小の河川をはじめ、低地や平野、台地と変化に富んだ自然環境の中で昔から人々が生活を営み、数多くの遺跡が残っている。特に、小貝川、常陸川、鬼怒川、そして江戸時代の大規模な河川改修工事により市の南部を流れる利根川などの水系によって形成された台地上には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数所在している。当水塚群が所在する沖積低地は、古くから幾度も小貝川や鬼怒川の氾濫による水害に遭ってきた。ここでは、当水塚群が築かれるようになった歴史的環境について述べることにする。

縄文時代以前の小貝川と鬼怒川によって形成された沖積低地は、縄文海進により現在の水海道地域付近まで海水が流入していた。弥生時代中期以降になると次第に海水が退き、沖積低地には湿地や沼が形成されるようになった。大化改新以降、小貝川の両岸では河川の洪水で溢れ出た水と一緒に流れ出した土砂が堆積して自然堤防が所々で形成され、現在の小貝川の流れに定着したと考えられている。さらに、周辺一帯は氾濫原の肥えた土壤を利用して田畠が作られ、集落が形成されるようになった²⁾。

奈良時代になると、天平宝字9年(765)に「東海道の問民苦使の藤原淨弁らが、下総国の毛野川(鬼怒川)を掘り、新しい水路を作って、洪水を防ぐ必要があることを太政官に上申し、その許しを得た。太政官は常陸

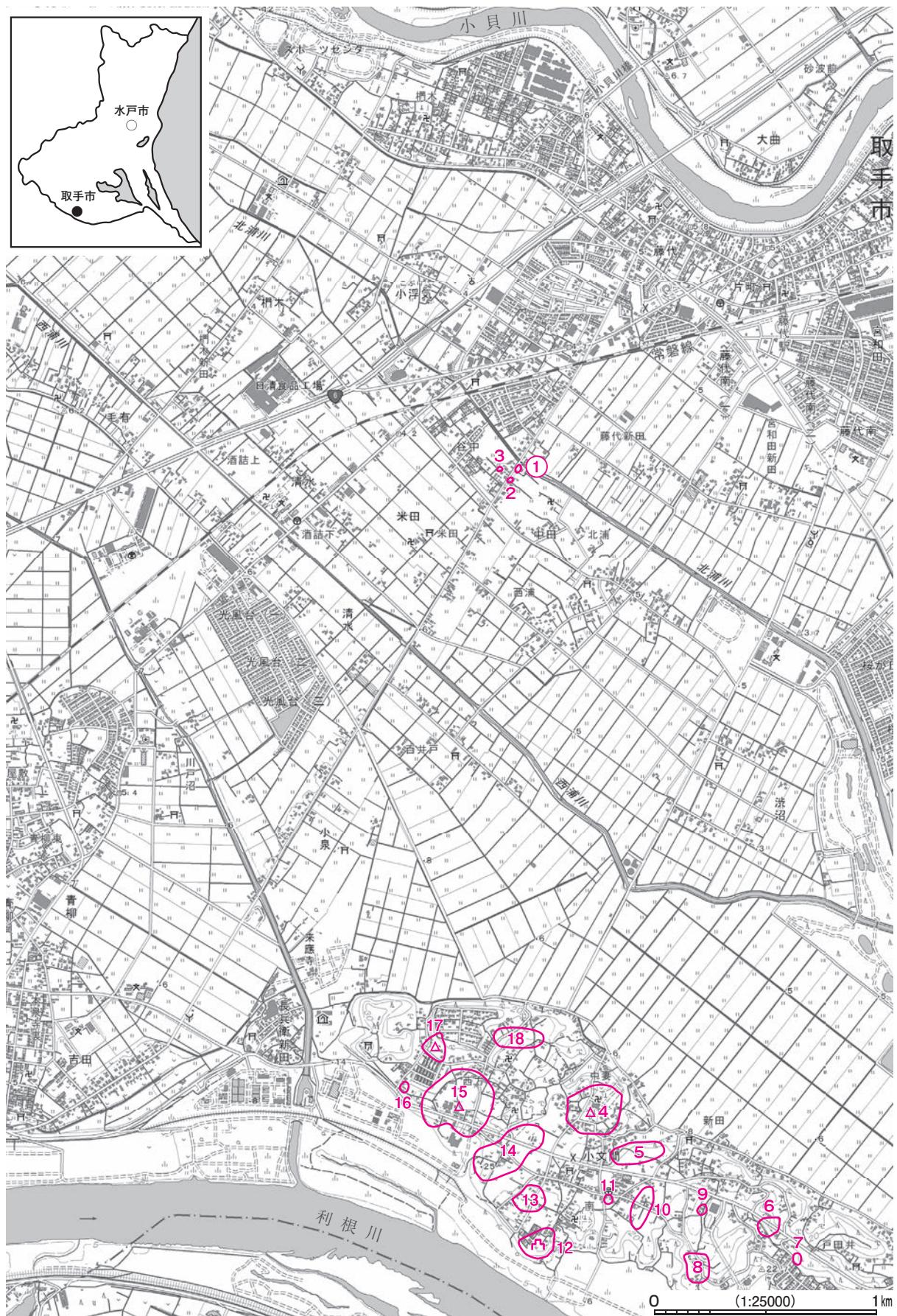
国にも協力するように命じたが、常陸国では新しい水路の予定地に神社や民家があるため工事を着工しなかった。そこで、下総国では再び陳情し、太政官は両国に下総国結城郡小塙郷小嶋村（常総市）から常陸国新治郡川曲郷受津村（八千代町）までの1,000余丈（約3,000m）を開掘するように命じた」ことが『続日本紀』³⁾に記されている。平安時代以降も国主導の治水事業が行われてきたが、洪水の多い沖積低地の治水対策は至難の業であった。そのため、小貝川が氾濫するたびに集落は頻繁に移動してきたが、この地に定住集落がつくられたのは室町時代末期、あるいは江戸時代に入ってからと考えられている⁴⁾。

江戸時代になると、東京湾に注いでいた利根川を常陸川に結びつけ、関東平野を東西に流れて太平洋に注ぐようにした「利根川東遷」の大工事が行われた。この河川改修工事は幾度に渡り各地で行われ、文禄3年（1594）に忍城主の松平忠吉の家臣小笠原吉次が、城周辺の水害対策のために上川俣（埼玉県羽生市）で南流と東流に分かれていた利根川を南流側の会の川を締め切ったことから始まった。県内では、代官頭伊奈忠治によって、元和7年（1621）に佐波から本郷（埼玉県加須市）にかけて新川通が開削され、承応3年（1654）に川妻（猿島郡五霞町）から水海（古河市）に至る赤堀川を開削してつなげ、現在の利根川の流れがつくられた⁵⁾。さらに寛永6年（1629）には、小貝川と鬼怒川の河川整備にも着手し、寺畠（つくばみらい市）で小貝川に合流していた鬼怒川を、板戸井（守谷市）までの約7kmに渡って開削し、常陸川に結びつけて寺畠の合流地点を締め切り、小貝川と鬼怒川を分離させた⁶⁾。寛永7年（1630）には、小貝川と牛久沼からの河川が合流する弥左衛門新田から戸田井（取手市）までの約26kmの河道を造成し、羽根野（利根町）で常陸川につなげて小貝川の合流地点を変えたこと⁷⁾が記録に残っている。この河川改修工事により、北相馬郡東部（取手市）の小貝川右岸に位置する地域は小貝川と利根川に囲まれた輪中となり、水害による災害が頻繁に起こるようになった。百井戸村（取手市）では、宝永5年（1708）から明和3年（1766）の58年間に14回の水害に遭い、甚大な被害をもたらした⁸⁾。また、毛有村（取手市）では、文政6年（1823）の小貝川と利根川の洪水により村が水没したが、郷倉を床上げして集穀を守ったとされている⁹⁾。

明治時代以降も小貝川下流域においては、幾度も洪水被害に遭っている。明治29年（1896）9月と昭和25年（1950）8月には、いずれも暴風雨によって小貝川下流域の高須村（取手市）で右岸の堤防が決壊し、約4km離れた当水塚群のある六郷地区まで浸水被害を受けている¹⁰⁾。現在もこの地区では水塚が遺存しており、第3号塚をはじめ水屋として使用しているところもある。当水塚群が築かれた詳細な時期については、文献等に残されていないため不明である。

註

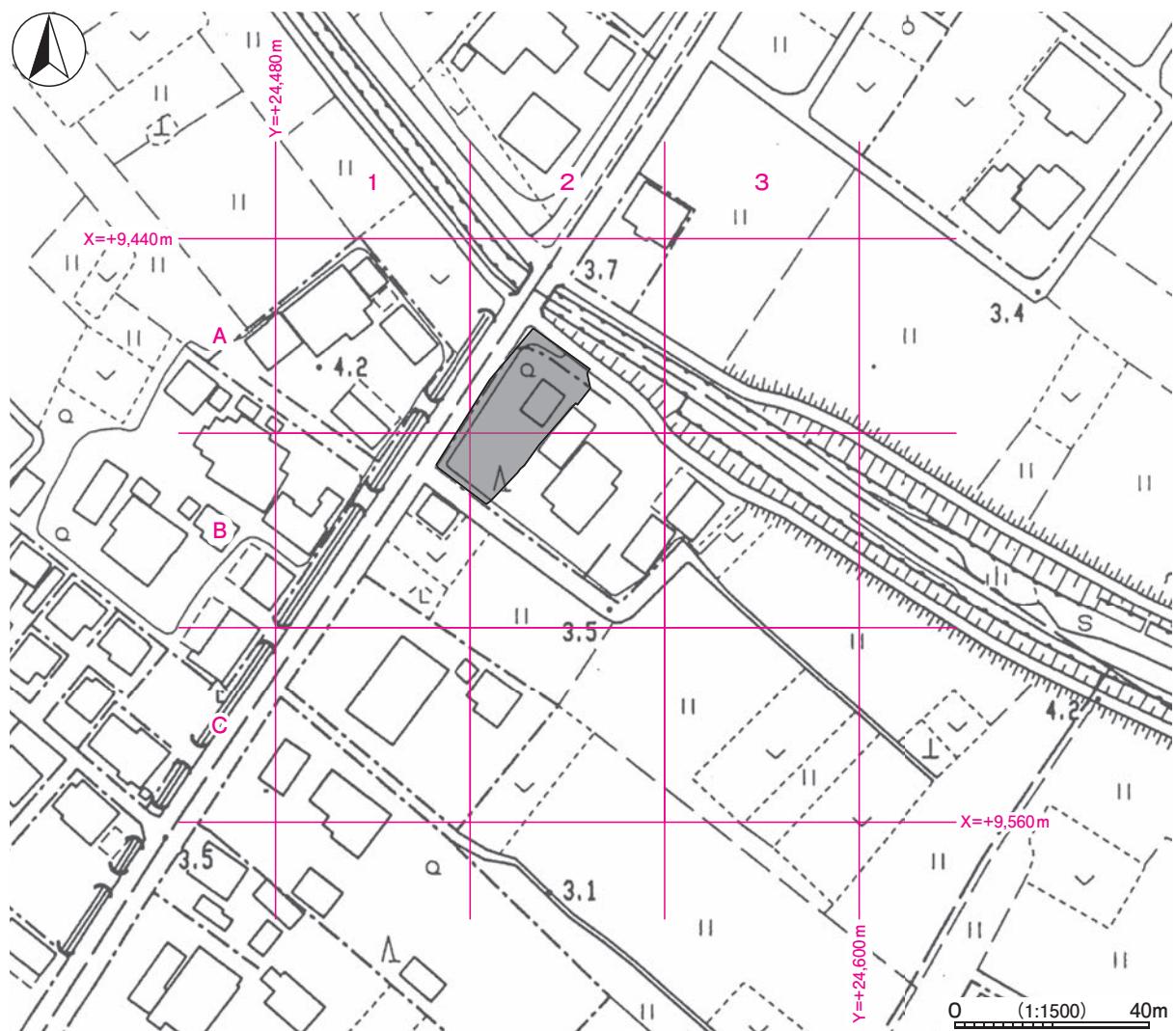
- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 龍ヶ崎』1987年12月
- 2) 藤代町史編さん委員会『藤代町史 通史編』藤代町 1990年3月
- 3) 宇治谷孟『続日本紀（中）全現代語訳』講談社 1992年11月
- 4) 註2) と同じ
- 5) 古河市史編さん委員会『古河市史 通史編』古河市 1988年2月
- 6) 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編Ⅱ』取手市 1992年3月
- 7) 註2) と同じ
- 8) 藤代町史編さん委員会「近世中期の年貢と災害」『紀要 第4集』藤代町 1980年3月
- 9) 註2) と同じ
- 10) 註2) と同じ



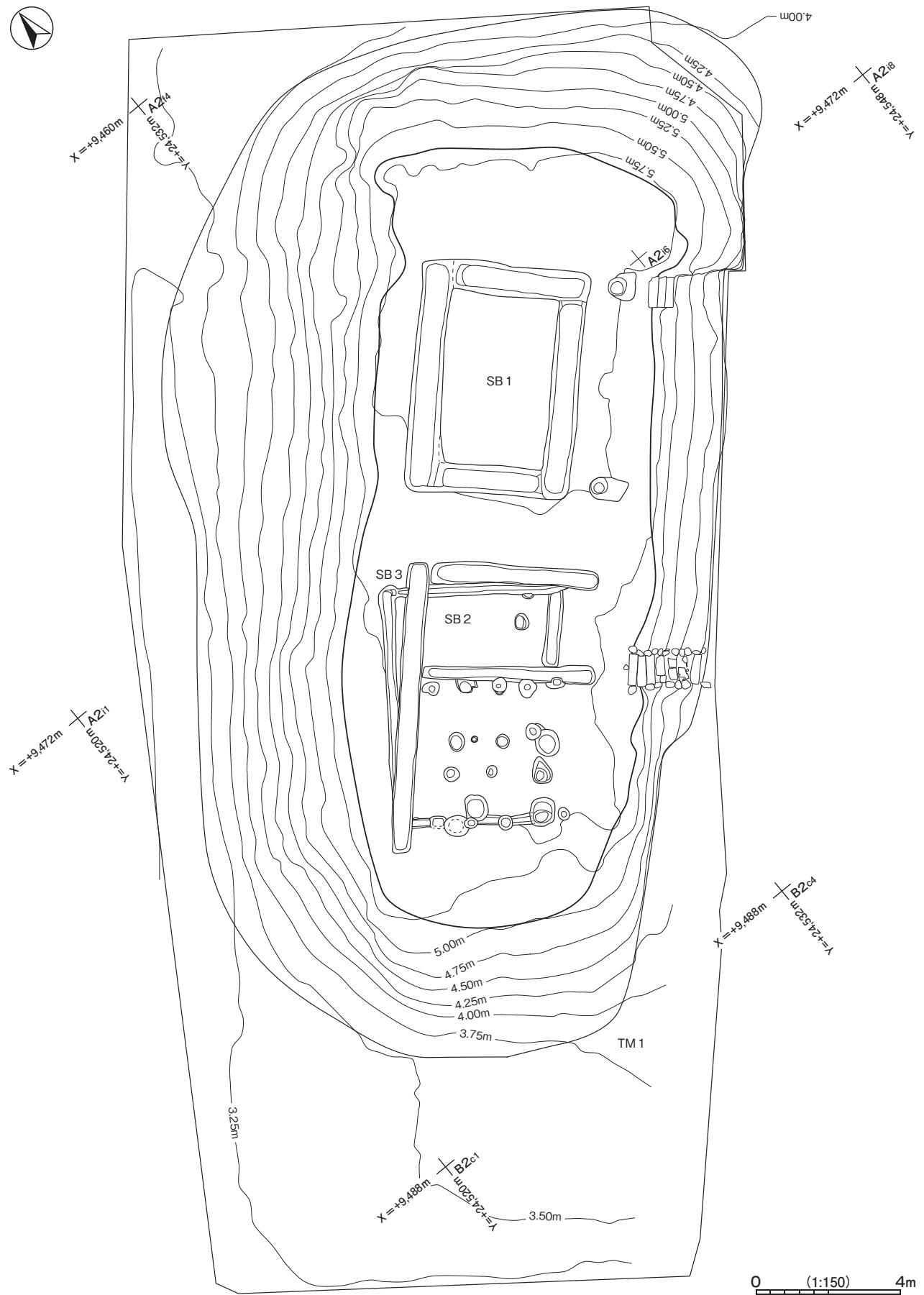
第1図 米田水塚群第1号塚周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1 「藤代」「取手」）

第1表 米田水塚群第1号塚周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	米田水塚群第1号塚							○	10	台道南3遺跡			○			
2	米田水塚群第2号塚							○	11	宗四郎坂古墳			○			
3	米田水塚群第3号塚							○	12	小文間城跡					○	
4	中妻貝塚	○							13	台道南遺跡	○					
5	春日神社遺跡	○							14	谷耕地遺跡	○					
6	戸田井遺跡				○				15	西方貝塚	○					
7	中谷津1遺跡				○				16	西方遺跡	○					
8	中谷津2遺跡				○				17	谷耕地下貝塚	○					
9	台道南2遺跡				○				18	谷耕地遺跡	○					



第2図 米田水塚群第1号塚調査区設定図（取手市都市計画図2,500分の1から作成）



第3図 米田水塚群第1号塚遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

米田水塚群第1号塚は、取手市の北東部に位置し、北浦川右岸の標高約3mの沖積低地に立地している。調査面積は511m²で、調査前の現況は宅地である。

調査の結果、江戸時代の水塚1基、礎石建物跡3棟を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に5箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢・浅鉢)、土師質土器(焰焰・七厘・大甕)、瓦質土器(火鉢)、陶器(碗・皿・擂鉢・徳利・壺・甕)、磁器(小壺・碗・中碗蓋・紅猪口・皿・猪口・鉢・段重・急須・土瓶・合子蓋・器械栓)、土製品(竈鍔)、石器・石製品(砥石・石臼・硯)、金属製品(錢貨・轡・鎌・錠前)、瓦(軒丸瓦)、自然遺物(貝殻・獸骨)などである。

第2節 基本層序

河川の氾濫原のため、沖積層の層序区分がなく、テストピットは設定しなかった。

遺構は、表土の上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、水塚1基と礎石建物跡3棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 水塚

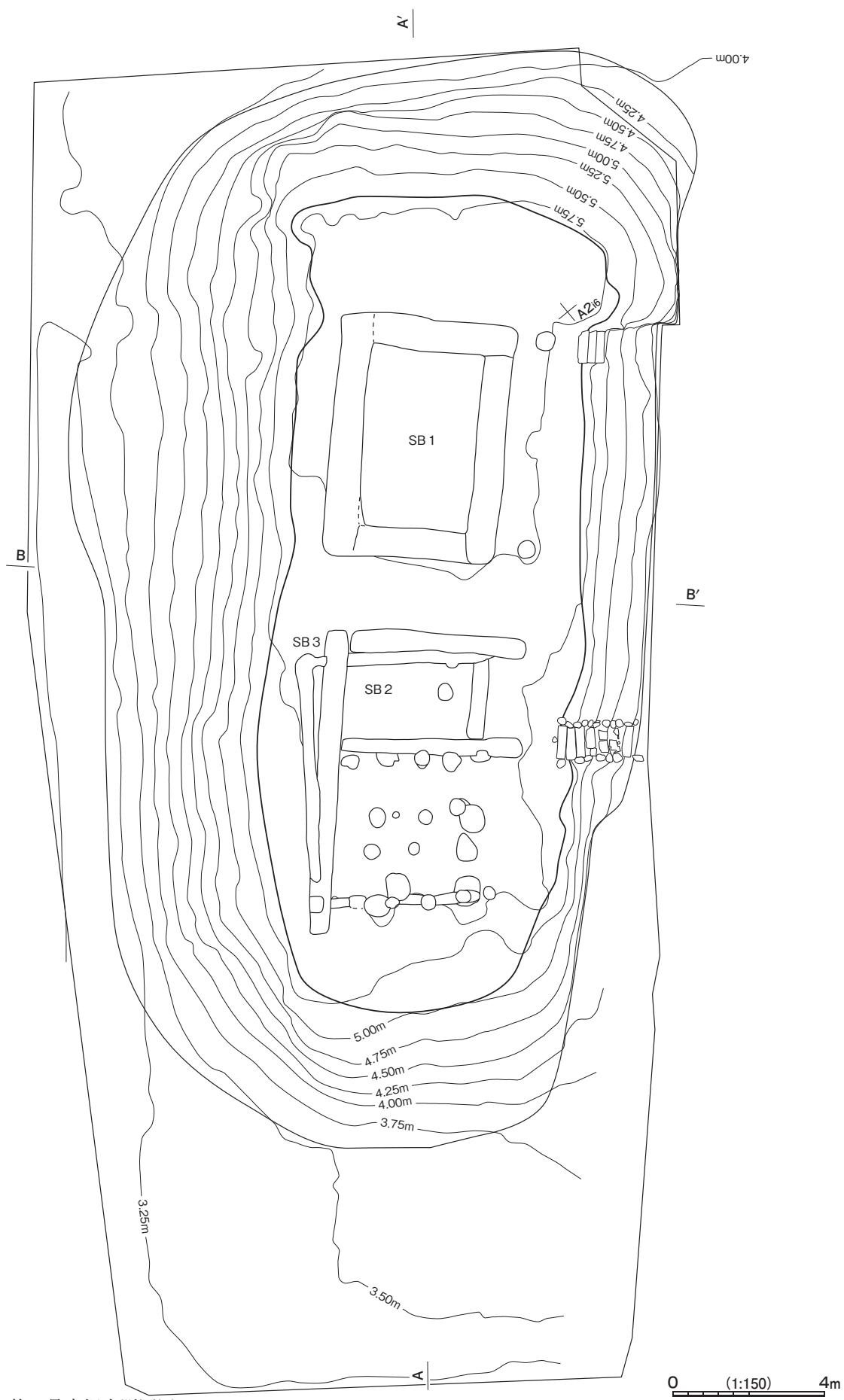
第1号水塚(第4~7図 PL1・4)

位置 調査区のA 2 f1 ~ B 2 c7 区、標高3mほどの低地に位置している。

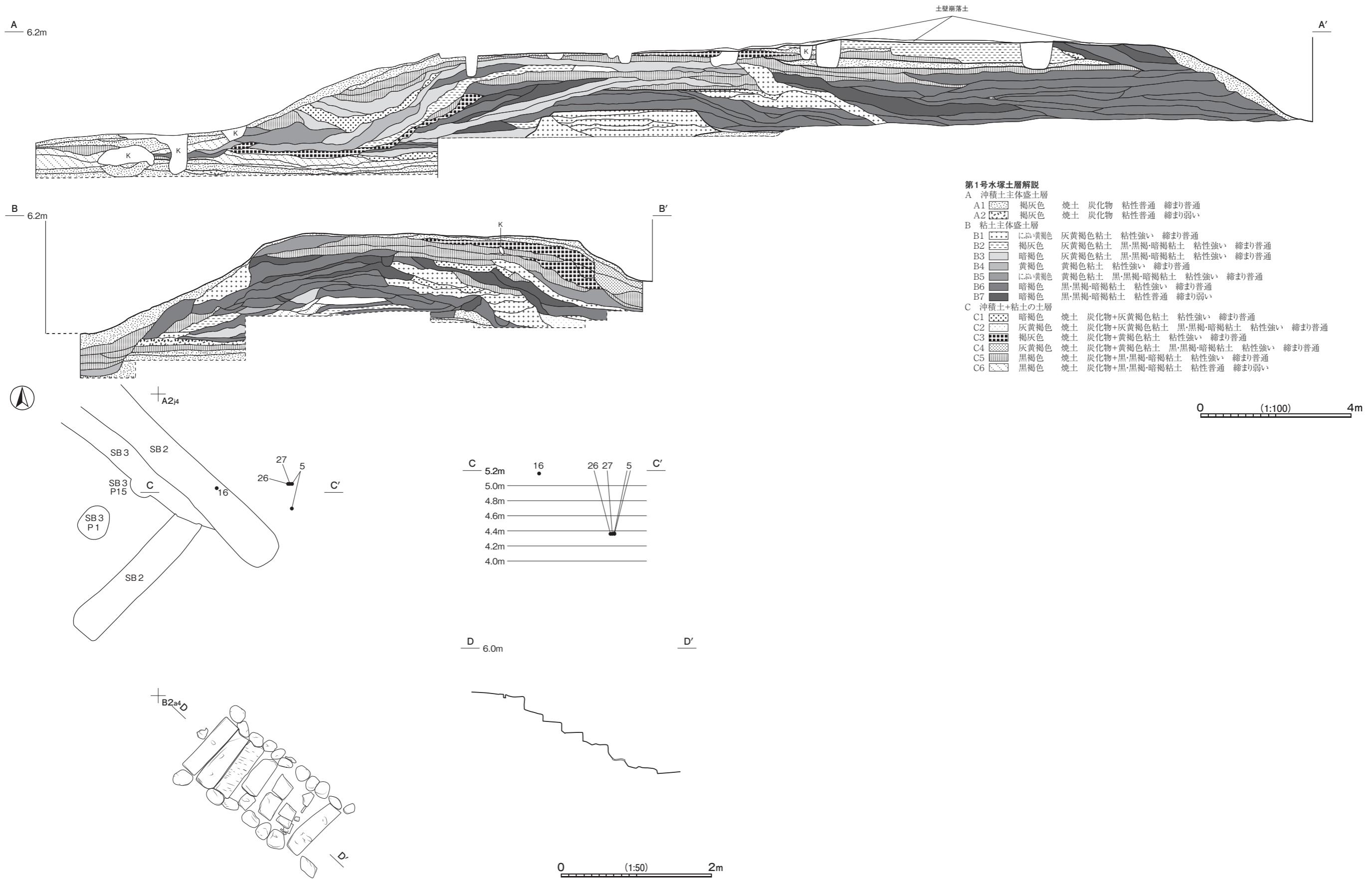
規模と形状 塚部の平面形は長径28.6m、短径15.5mの橢円形で、長径方向はN - 40° - Eである。基底部から塚頂部までの盛土高は3.2mである。塚頂部は長軸21.5m、短軸8.3mの不整長方形で平坦である。

構築土 177層に分層できる。砂粒を含んだ褐灰色土の整地層を基部とし、黒色粘土ブロックや暗褐色粘土ブロックなどを含む沖積土を積み上げて構築している。構築土を含有物と土質からA、B、Cの3層に分けた。Aは沖積土層で、色調は褐灰色を呈し、締まり具合から2種類に細分した。Bは粘土を主体とする層で、色調は粘土色に応じてにぶい黄褐色から暗褐色に分け、粘性の質と締まり具合などから7種類に細分した。Cは沖積土と粘土が混じり合う層で、色調は粘土色に応じて灰黄褐色から黒褐色に分け、粘性の質と締まり具合から6種類に細分した。また、硬化した層を4か所確認した。中央部南側の下層部に灰黄褐色粘土主体の盛土を基壇状にして版築し、暗褐色粘土と灰黄褐色粘土を主体とした土壤を盛土して突き固めている。暗褐色粘土を北方向に拡張しながら積み上げ、基底面から高さ2mほどに版築している。斜面部は褐灰色の沖積土を盛土し、頂部は灰黄褐色粘土を中心とした粘土質の土壤を突き固めて構築している。

建造物確認状況 調査前は塚頂部の整地面に第1号礎石建物が現存していたが取り壊され、調査開始時は第1号水塚のみが遺存し、塚頂部の整地面に第1~3号礎石建物の基礎を確認した。

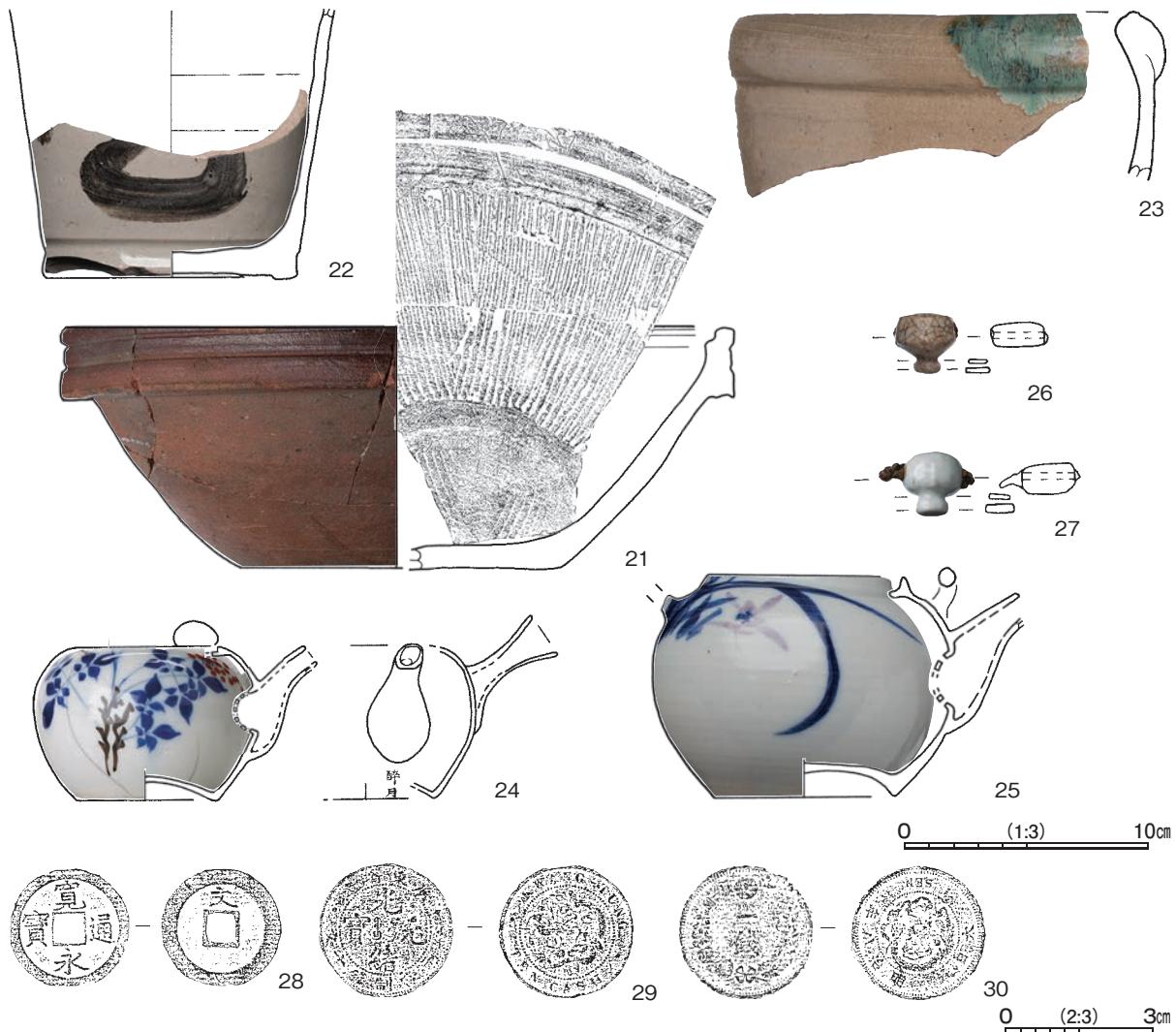


第4図 第1号水塚実測図(1)





第6図 第1号水塚出土遺物実測図(1)



第7図 第1号水塚出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 土師質土器片 16点（小皿2, 焙烙3, 七厘3, 鍋7, 不明1）, 陶器片 29点（天目茶碗1, 小碗1, 碗1, 小皿3, 大皿1, 小鉢1, 中鉢1, 擣鉢6, 鉢3, 蓋1, 香炉2, 德利1, 瓢6, 不明1）, 磁器片 80点（小碗31, 中碗7, 碗2, 猪口5, 紅猪口1, 小皿6, 皿1, 長皿1, 小鉢3, 鉢9, 壺2, 德利5, 瓢1, 急須3, 土瓶1, 器械栓2）, 銭貨3点（寛永通寶, 光緒元寶, 一錢硬貨）, ガラス製品1点（おはじき）, 貝殻2点（ヤマトシジミ）, 繩文土器片3点（深鉢）が出土している。5・16・26・27は塚頂部の中央部南寄りの整地層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土した陶磁器から19世紀前半に比定できる。構築土中に焼土や炭化材、粘土が含まれていることから、水塚周辺の水田の耕作土を利用したと考えられる。東部と南部に石段が付設されていた。東部は3段、南部は7段ある。石材は段板に凝灰岩と瓦片を一部使用している。凝灰岩は第1号礎石建物跡の間知石に使われているものと類似していることから、同時期に構築されたものと推測される。塚の西側に掘り込み跡を確認しており、構堀と推測される。

第2表 第1号水塚出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師質土器	焙烙	-	(1.3)	[25.0 ~27.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	底部平坦	盛土	5%
2	土師質土器	七厘	-	(13.2)	22.2	長石	浅黄橙	普通	箱口形	盛土	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
3	陶器	天目茶碗	-	(2.5)	-	長石・黒色粒子 にぶい黄褐色	外面下段露胎	鉄釉	瀬戸・美濃	盛土	5%
4	磁器	小碗	[9.0]	4.2	3.7	緻密 灰白	染付 草文。高台脇一重圏線 釉付着	透明釉	肥前	盛土	30% 19世紀以降
5	磁器	小碗	[7.5]	5.4	3.7	緻密 白	染付 筒形 外面格子文と桐散し文。底部 一重圏線と雨竜文 見込一重圏線と五弁花纹	透明釉	肥前	塚頂部整地層	40% 170年代~1810年代
6	磁器	小碗	[6.8]	5.3	3.5	緻密 灰白	染付 筒形 緑内四方櫛 外面菊花文と斜格子文 底部一重 圏線と雨竜文 高台脇一重圏線 見込一重圏線と五弁花纹	透明釉	肥前	盛土	70% 170年代~1810年代
7	磁器	小碗	[6.6]	(4.1)	-	緻密 灰白	染付 筒形 外面菊花文と斜格子文	透明釉	肥前	盛土	20% 170年代~1810年代
8	磁器	小碗	7.0	(4.4)	-	緻密 灰白	染付 筒形 菊花文と斜格子文 井 桁 上・下端一重圏線	透明釉	在地	盛土	20% 19世紀以降
9	磁器	中碗	[11.0]	6.3	[3.8]	緻密 灰白	染付 丸形 千鳥文 貫入	透明釉	肥前	盛土	50% 18世紀以降
10	磁器	中碗	[11.2]	5.9	3.7	緻密 白	コバルト染付 花文	透明釉	瀬戸・美濃	盛土	30% 1870年代以降
11	磁器	碗	-	(3.2)	-	緻密 灰白	染付 腰張形 一重圏線と網目文	透明釉	肥前	盛土	25% 19世紀以降
12	磁器	碗	-	(3.8)	-	緻密 白	銅板絵付 青海波文と四方櫛	透明釉	瀬戸・美濃	盛土	5% 1890年代以降
13	磁器	紅猪口	6.7	3.3	2.7	緻密 白	染付 笹文	透明釉	肥前	盛土	80% 19世紀以降
14	磁器	小皿	[13.1]	3.4	[7.0]	緻密 白	染付 U字高台 外面唐草文 下端一重圏線 高台脇二重圏線 内面花唐草文と二重圏線	透明釉	瀬戸・美濃	盛土	25% 1810年以降
15	磁器	小皿	[11.6]	2.8	[6.0]	緻密 灰白	銅板絵付 内面上端菱形文 見込唐 草文と芭蕉文	透明釉	不明	布掘り 覆土中	20% 近現代
16	陶器	大皿	-	(3.4)	[8.2]	長石・黒色粒子 灰白	高台部露胎 貫入	灰釉	不明	塚頂部整地層	20%
17	磁器	長皿	-	(2.3)	-	緻密 オリーブ灰	型打成形 クロム青磁	青磁釉	瀬戸・美濃	盛土	1890年以降
18	磁器	皿	-	(2.6)	[6.4]	緻密 灰白	型紙絵付 蛇の目四型高台 外面下端 二重圏線 内面桜花文 見込松竹梅	透明釉	不明	盛土	近現代
19	磁器	小鉢	[10.4]	4.8	[5.0]	緻密 灰白	コバルト染付 輪花形 水裂文 高台 脇二重圏線	透明釉	在地	盛土	20% 1870年代以降
20	陶器	中鉢	[18.8]	7.9	7.0	長石 浅黄橙	染付 輪花形 釉抜きと銀彫り 見込梅花文 高台縁「春陶」印刻 底部鉢「家氏十二」貫入	鉄釉	不明	盛土	60% 近現代
21	陶器	擂鉢	[26.6]	9.9	[13.2]	長石・石英 赤褐色	外面へラ削りのちへラナデ 内面9本 単位の擂目	無釉	明石系	盛土	40% 19世紀以降
22	陶器	德利	-	(11.1)	10.2	長石 灰白	筆書「屋」	灰釉	在地	盛土	40% 近現代
23	陶器	甕	[36.6]	(7.0)	-	長石・石英・黒色粒子 灰白	貫入	灰釉 青磁釉	笠間	布掘り 覆土中	5% 近現代
24	磁器	急須	5.8	7.5	5.8	緻密 白	染付 横手形 注口貼付 南天文 「醉月」印判	透明釉	瀬戸・美濃	盛土	80% 近現代
25	磁器	土瓶	8.1	9.4	7.6	緻密 灰白	コバルト染付 釣手形 注口貼付 蘭文	透明釉	瀬戸・美濃	盛土	90% 1870年代以降
26	磁器	器械栓	2.2	2.3	1.0	緻密 灰黃	手捏ね 貫入 金具一部欠損	透明釉	不明	塚頂部整地層	90% 近現代
27	磁器	器械栓	1.8	2.5	1.2	緻密 灰白	手捏ね 金具一部欠損	透明釉	不明	塚頂部整地層	90% 近現代

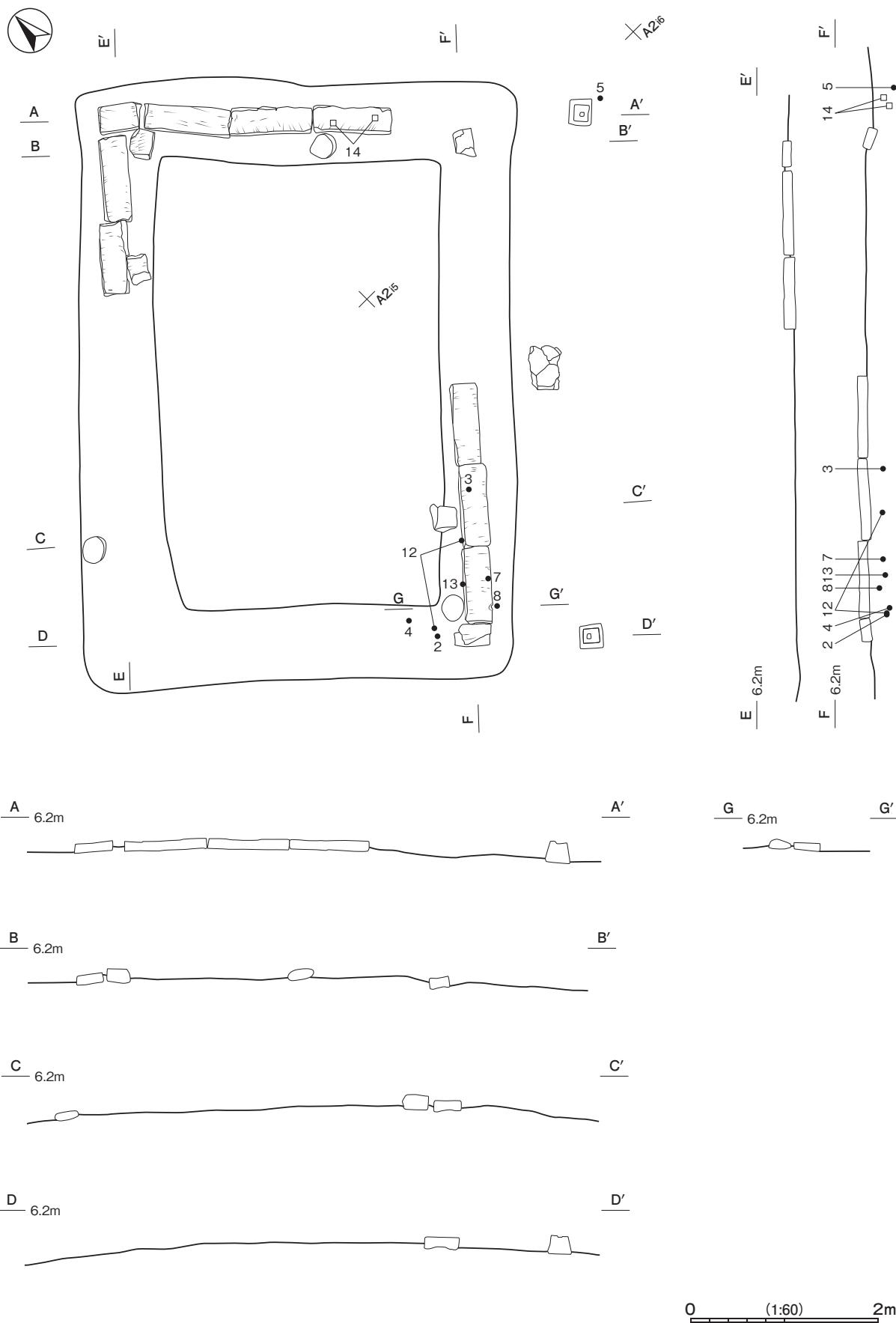
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
28	寛永通寶	2.52	0.57	0.13	3.92	銅	1668年	新寛永 背上「文」	盛土	
29	光緒元寶	2.79	-	0.17	7.76	銅	19世紀末	広東省造 每元當制錢十文 光緒王朝期	盛土	
30	一錢硬貨	2.79	-	0.15	6.49	銅	1873年	明治八年	盛土	

第1号礎石建物跡（第8～12図 PL2・4）

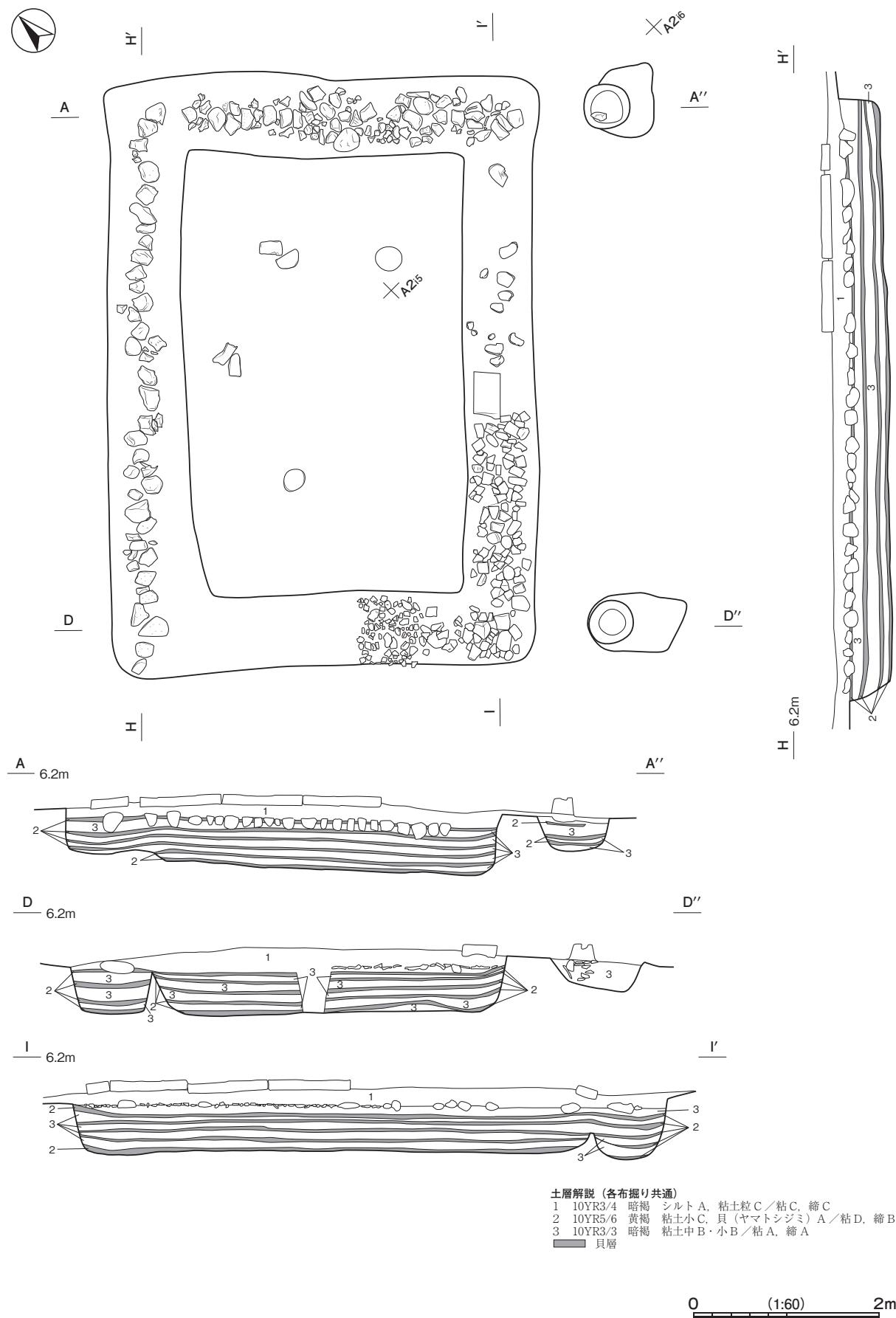
位置 調査区中央部のA2h4～A2i5区、標高6mほどの第1号水塚の頂部北東に位置している。

規模と構造 身舎は土台敷きの建物跡で、東面に正面庇1間が付設されている。桁行方向はN-40°-Eの南北棟である。規模は桁行6.28m、梁行4.58mで、面積は28.76m²、平面形は長方形である。柱間寸法は桁行、梁行とも不明で、西側と東側の桁行方向と北側の梁行方向の一部に土台石とした間知石が据えられていた。西側と北側の土台石の下には円礫や割石が敷き詰められ、東側の土台石の下には、割石や瓦片、陶磁器片などが敷き詰められていた。建物中央部に大引きの束石が据えられていた。

基礎地業 6か所。建物の桁行方向と梁行方向に4か所の溝状の掘り込みを呈した布掘りを確認した。いずれも平面形は隅丸長方形で、掘方の断面は逆台形である。長さは桁行方向が長軸5.00～6.28m、短軸0.75～0.95m、梁行方向が長軸2.86～3.82m、短軸0.78～0.92mで、深さは48～75cmである。埋土は、黒褐色と暗褐色の粘質土を突き固めて貝殻を互層に充填している。第2・3層を構築した後、根石や礫、瓦片などを充填し、第1層を整地して上部に凝灰岩を使用した間知石を据えていた。建物跡東側でP1・P2を確認した。P1の

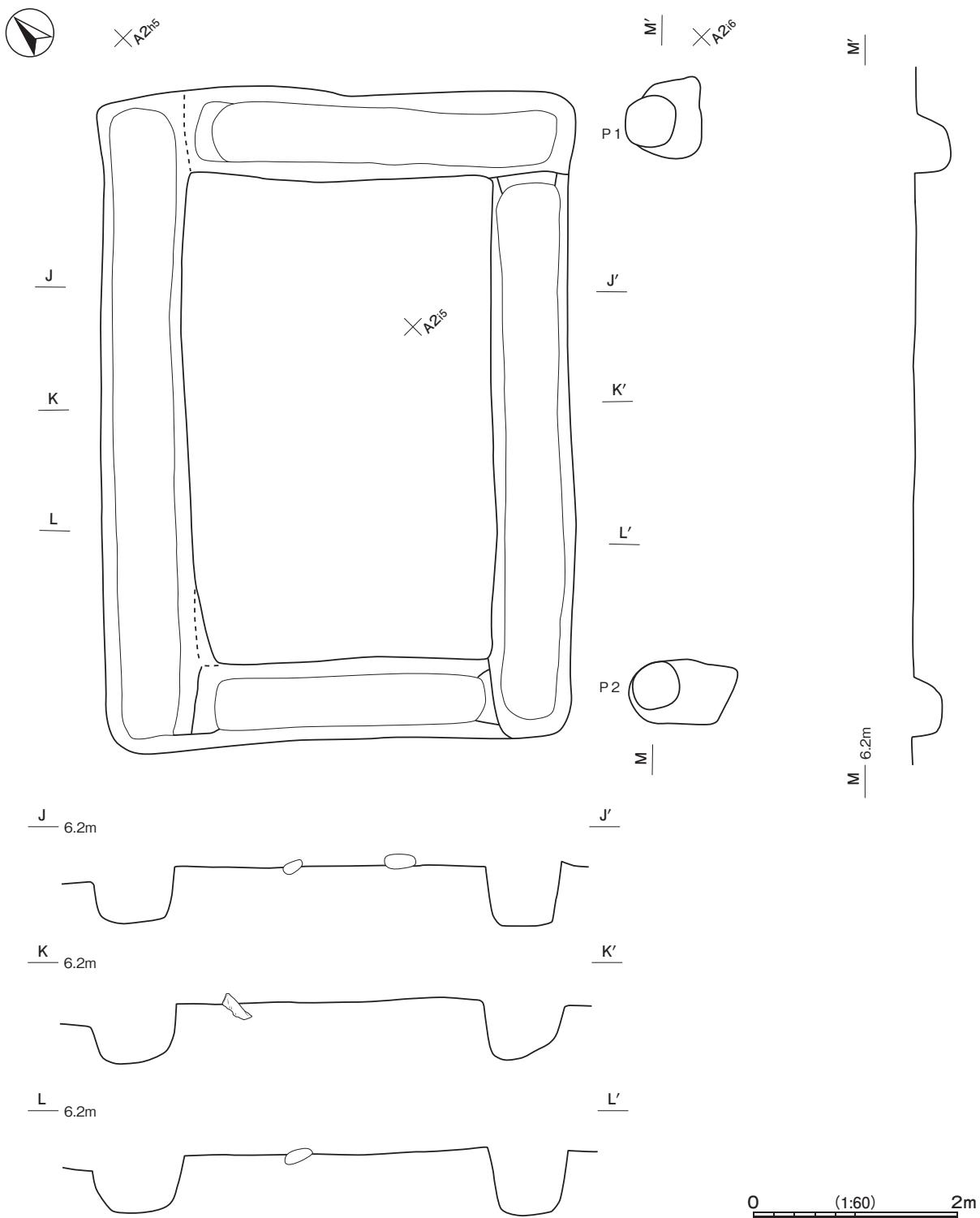


第8図 第1号礎石建物跡実測図(1)



第9図 第1号礎石建物跡実測図(2)

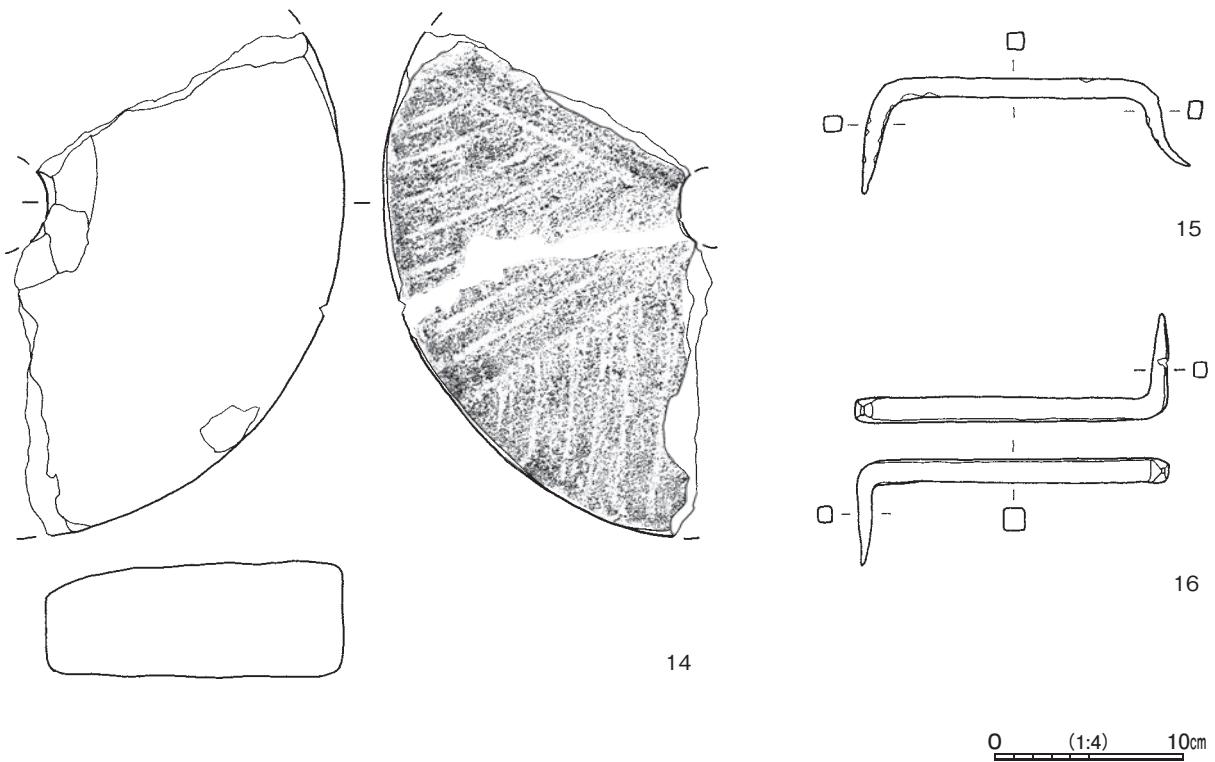
平面形は円形で径 0.50 m, 深さ 40 cm, P 2 の平面形は橢円形で長径 0.54 m, 短径 0.48 m, 深さ 28 cm, 掘方の断面はいずれも逆台形である。P 1, P 2 ともに底面に貝殻と礫を充填している。埋土は、P 1 は貝殻と礫を互層に充填し、突き固めて積み上げた後、最上部に礎石を据えている。P 2 は根石を充填した後、最上部に礎石を据えている。



第 10 図 第 1 号礎石建物跡実測図(3)



第11図 第1号礎石建物跡出土遺物実測図(1)



第12図 第1号礎石建物跡出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 土師質土器片 6 点（鍋），陶器片 24 点（小皿 1，鉢 7，擂鉢 5，壺 1，甕 5，徳利 2，袋物 1，不明 2），磁器片 53 点（小壺 3，小碗 24，中碗 1，中碗蓋 2，大碗 1，色絵碗 1，小皿 7，中皿 7，皿 1，合子蓋 1，段重 1，徳利 3，華瓶 1），石器 1 点（石臼），金属製品 7 点（轡 1，鎌 4，錠前 1，不明 1），繩文土器片 40 点（深鉢 39，浅鉢 1）が出土している。2～4・7・8・12・13は南東コーナー部，14は北部の布掘り覆土上層から，5はP1覆土中層から出土している。

所見 建物が築造された時期は、出土遺物から 19 世紀後半に比定できる。家主への聞き取り調査から、遺構の性格は水屋で、穀物等を貯蔵していたとされる。南東コーナー部に据えられた間知石下から瓦片や陶磁器片が多量に出土していることから、建て替えられた可能性が考えられる。

第3表 第1号礎石建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
1	磁器	小壺	[6.0]	5.3	[2.4]	緻密 灰白	染付 口紅	瑠璃釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土中	30%
2	磁器	小碗	[8.2]	4.6	3.7	緻密 灰白	コバルト染付 外面梅花文 上下端 一重圈線 高台脇一重圈線	透明釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土上層	50% 1870年代以降
3	磁器	中碗	[12.2]	6.0	[5.6]	緻密 灰白	染付 端反形 外面梅流水文 内面連弁文 見込二重圈線内松葉文 高台脇二重圈線	透明釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土上層	30% 1810年代以降
4	磁器	中碗蓋	9.4	2.6	3.9	緻密 白	染付 端反形 輪拂み脇二重圈線 緑外・内青磁文と 四重圈線 外面七宝繋ぎ 内面一重圈線と七宝繋ぎ	透明釉	肥前	布掘り 覆土上層	60% 19世紀以降
5	磁器	中碗蓋	[9.6]	2.8	5.8	緻密 灰白	染付 緑内二重圈線 外面鳥文と稻穂 文見込一重圈線内鳥文 輪拂み内鳥文	透明釉	肥前	P1 覆土中層	60% 18世紀以降
6	磁器	小皿	[12.6]	3.4	[7.0]	緻密 灰白	染付 U字高台 外面唐草文 内面扇文 見 込文様。高台脇二重圈線 高台内一重圈線	透明釉	在地	布掘り 覆土中	40% 19世紀以降
7	磁器	小皿	-	(3.9)	8.4	緻密 白	染付 蛇の目凹型高台 見込山水文	透明釉	肥前	布掘り 覆土上層	50% 18世紀以降
8	磁器	小皿	-	(2.4)	8.8	緻密 白	染付 蛇の目凹型高台 見込樓閣山 文	透明釉	肥前	布掘り 覆土上層	50% 18世紀以降
9	磁器	小皿	[11.0]	2.4	[6.2]	緻密 灰白	銅板絵付 口紅 よろけ縞文と二重 円帯文	透明釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土中	5% 1880年代以降
10	磁器	段重	[13.7]	7.3	[9.8]	緻密 白	染付 唐草文	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	30%
11	磁器	合子蓋	[9.0]	(2.1)	-	緻密 白	染付 牡丹文 貫入	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
12	陶器	徳利	[4.2]	[26.2]	[12.2]	長石 灰白	「高田徳利」形 五合徳利	灰釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土上層	50% 18世紀後半以降
13	陶器	壺	-	(6.6)	[23.6]	長石・石英・黒色粒子 明赤褐	外面灰釉流し 底部穿孔と塞いだ痕 三足貼付。 火消し壺。	鉄釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土上層	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	石臼	[36.0]	[5.0]	6.0	(4,540)	花崗岩	下側に掘り目 根石転用	布掘り 覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
15	鎌	17.1	6.0	0.7~0.9	112.3	鉄	断面四角形	盛土	
16	鎌	16.4	5.5	0.7~1.2	192.7	鉄	断面四角形	盛土	

第2号礎石建物跡（第13・14図 PL3・4）

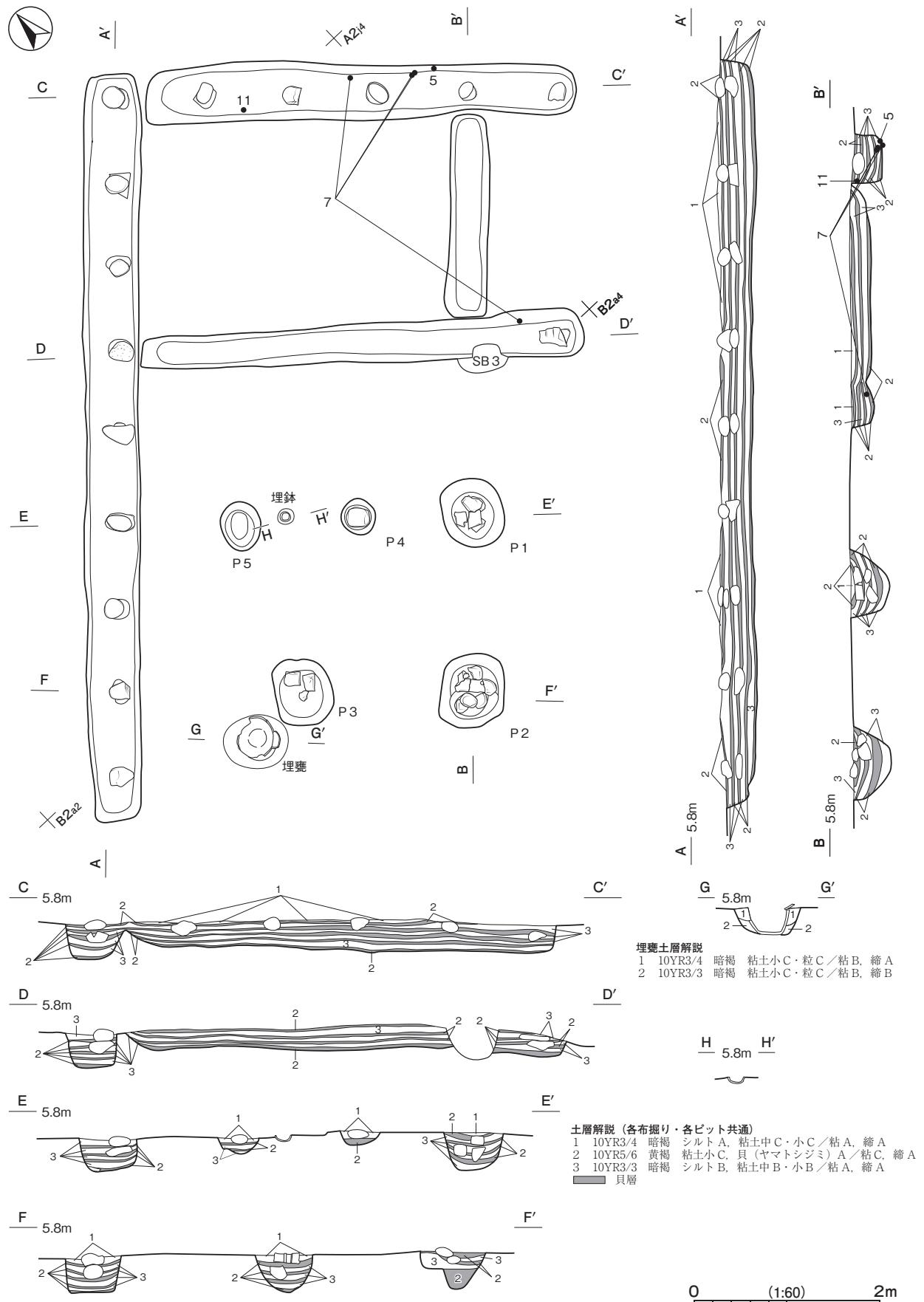
位置 調査区中央部のA 2i3～B 2a3区、標高6mほどの第1号水塚の頂部南西に位置している。

重複関係 第3号礎石建物跡を掘り込んでいる。

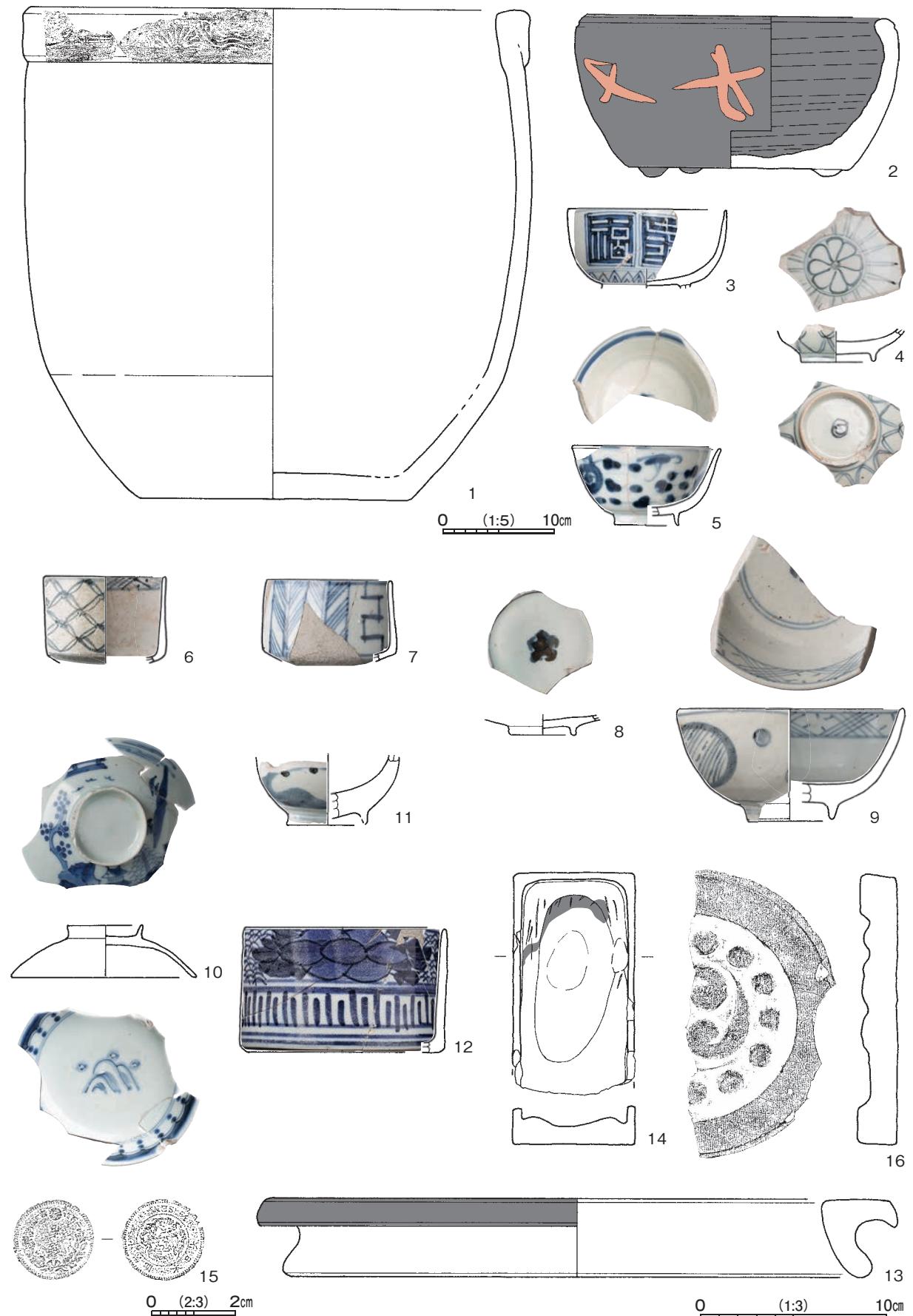
規模と構造 桁行3間半、梁行2間の側柱建物で、東面北側に桁行1間半、梁行半間の庇と南面西部に桁行、梁行半間ずつの2間が付設されていた。桁行方向はN-43°-Eの南北棟で、桁行は7.97m、梁行5.22mで、面積は41.60m²、平面形は長方形である。柱間寸法は、桁行が0.90m（3尺）、梁行が0.95m（3尺）を基本とし、柱筋はきれいに揃っている。

基礎地業 9か所。建物の桁行方向2か所と梁行方向2か所に布掘りした礎石列を確認した。いずれも平面形は隅丸長方形で、掘方の断面は逆台形である。桁行方向の西面は長さが長軸8.15m、短軸0.61m、深さ0.4mで、礎石は確認できず、根石にあたる扁平な石と丸石の組み合わせを等間隔に9か所確認した。東面は長さが長軸2.00m、短軸0.45m、深さ25cmで、礎石または根石は確認できなかった。梁行方向の北面は長さが長軸5.20m、短軸0.66m、深さ38cmで、礎石は確認できず、根石にあたる丸石を等間隔に5か所確認した。南面は長さ長軸5.44m、短軸0.54m、深さ28cmで、礎石は確認できず、根石にあたる扁平な石を東端で1か所確認した。埋土は、黒褐色と暗褐色の粘質土を突き固めて貝殻を互層に充填して地業している。桁行方向の西面は、第2・3層を構築しながら根石を据えている。梁行方向の北面は粘質土と貝殻を互層に構築した後、根石を据えている。中央部は東側の第2・3層を構築しながら根石を充填している。このほかに建物跡南側にP1～P5を確認した。平面形はP1～P3は隅丸長方形、P4・P5は円形または橜円形である。P1は長径78cm、短径65cm、深さ43cm、P2は長径74cm、短径70cm、深さ41cm、P3は長径74cm、短径61cm、深さ43cm、P4は長径42cm、短径38cm、深さ18cm、P5は長径55cm、短径45cm、深さ21cmである。P1～P5の掘方断面は、いずれもU字形である。埋土は、いずれも黒褐色と暗褐色の粘質土を突き固めて貝殻を互層に充填して地業している。P1～P3は、中間層を構築しながら割石を充填している。P2～P5は、最上層を整地した後に根石を据えている。第3号礎石建物跡を掘り込んでいることから、使用した根石は転用されたものと推測される。

付属施設 2か所。大甕が建物の南西部に付設されており、掘方規模は長径70cm、短径60cm、深さ30cmの橜円形である。家主への聞き込み調査から便槽甕として使用していたものである。火鉢が建物の中央部に付設されており、掘方規模は径20cm、深さ10cmの円形である。用途は不明であるが、第3号礎石建物跡に関連した付属施設の可能性も考えられる。



第13図 第2号礎石建物跡実測図



第14図 第2号礎石建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片 10 点(鉢 1, 鍋 5, 甕 2, 大甕 1, 不明 1), 瓦質土器片 1 点(火鉢), 陶器片 26 点(皿 1, 鉢 7, 猪口 1, 片口鉢 1, 撃鉢 4, 徳利 9, 甕 1, 不明 2), 磁器片 80 点(小壺 2, 小碗 54, 中碗 2, 中碗蓋 2, 碗 2, 皿 4, 鉢 2, 猪口 7, 段重 1, 急須 3, 不明 1), 土製品 1 点(竈鍔), 石製品 1 点(硯), 銭貨 1 点(半錢硬貨), ガラス製品 3 点(おはじき 2, 不明 1), 瓦片 1 点(軒丸瓦), 繩文土器片 27 点(深鉢 26, 浅鉢 1), 自然遺物 1 点(獸骨)が出土している。1 は P 3 脇の埋甕, 2 は P 4・P 5 の間に位置する埋鉢である。5 は北部, 7 は北部と北東部の布掘り覆土下層から, 11 は北部の布掘り覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 建物が築造された時期は、出土した陶磁器から 19 世紀後半に比定できる。家主への聞き取り調査から遺構の性格は母屋である。建物北部に 4 帖ほどの土間と中央部に 8 帖の畳部屋、南部に半間の便所・押入れがあり、建物東面の北部に庇、南部に濡れ縁が付設されていたとみられる。

第4表 第2号礎石建物跡出土遺物一覧

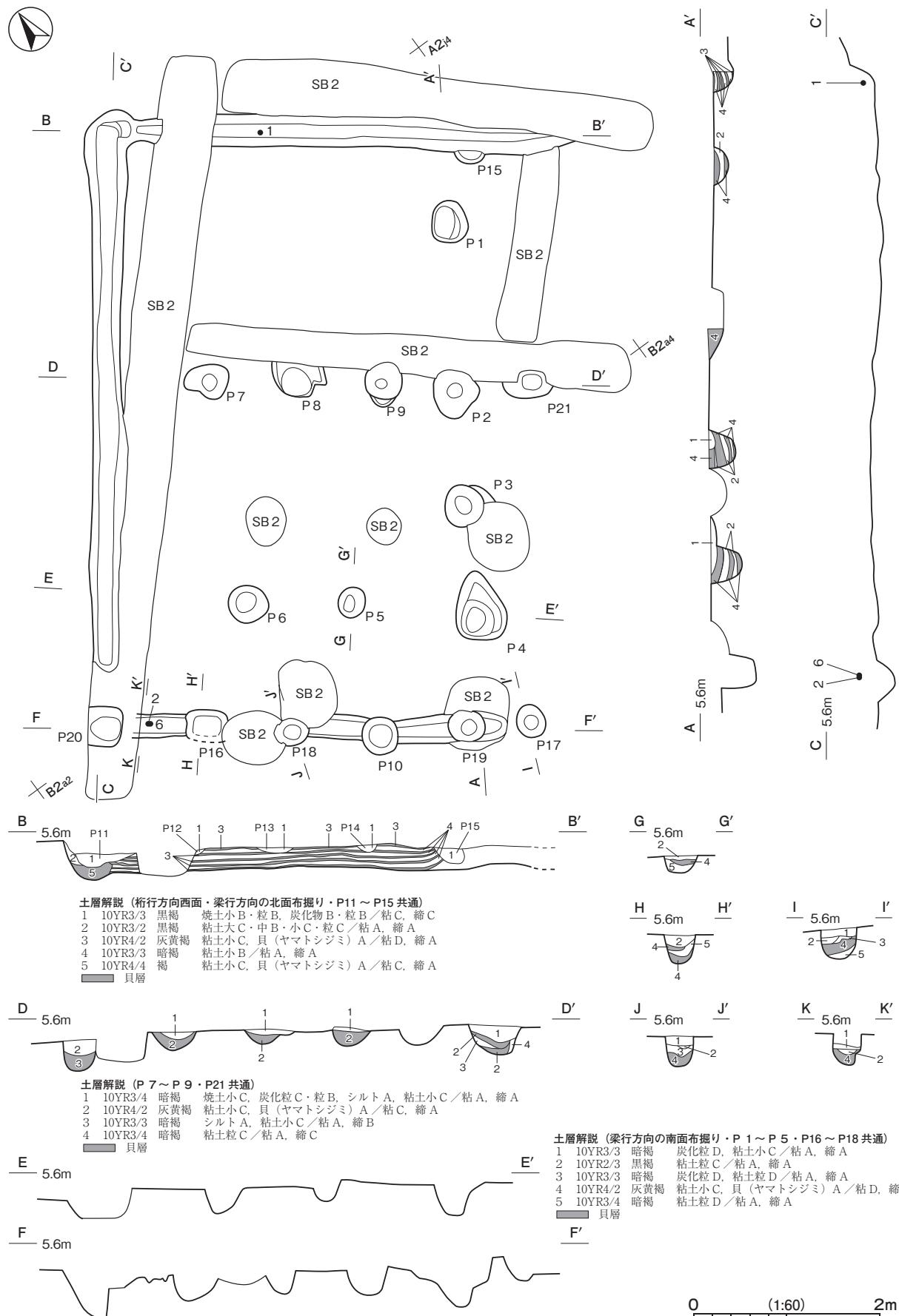
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
1	土師質土器	大甕	[44.6]	44.0	24.4	長石・赤色粒子・黒色粒子・細礫	にぶい褐	普通	ロクロ成形 口縁部菊水印刻	埋甕	70%	
2	瓦質土器	火鉢	[16.0]	8.6	11.2	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ヘラ削りのちハラナデ 三足貼付 体部外・底部に朱墨 外面「□」「△」	埋鉢	60%	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴		釉薬	産地	出土位置	備考
3	磁器	小碗	[8.6]	(4.2)	—	緻密 白	染付 外面白抜き「福」「壽」字 剣先文	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	20% 18世紀後半以降	
4	磁器	小碗	—	(1.8)	4.0	緻密 灰白	染付 外面二重網目文 見込二重圈線と菊花文 高台脇一重圈線 高台内渦福	透明釉	在地	布掘り 覆土中	30% 19世紀以降	
5	磁器	小碗	[8.0]	4.3	3.5	緻密 白	染付 端反形 外面草花文 見込二重圈線と五弁花文	透明釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土下層	40% 1840年代以降	
6	磁器	小碗	[6.6]	(4.6)	—	緻密 白	染付 筒形 縁内四方襟 外面七宝 繋ぎ	透明釉	在地	布掘り 覆土中	25% 19世紀以降	
7	磁器	小碗	[6.6]	(4.4)	—	緻密 灰白	染付 筒形 矢羽根文と櫛葉文 見込一重圈線	透明釉	肥前	布掘り 覆土下層	70% 18世紀後半以降	
8	磁器	小碗	—	(1.1)	3.6	緻密 灰白	染付 筒形 見込圈線と五弁花文	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	10% 18世紀後半以降	
9	磁器	中碗	[12.0]	6.0	[4.6]	緻密 灰白	染付 くらわんか 外面丸文 内面四方襟 見込二重圈線と五弁花文 高台脇二重圈線	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	20% 18～19世紀	
10	磁器	中碗蓋	10.0	2.3	—	緻密 灰白	染付 端反形 外面山水文 見込山文と千鳥文	透明釉	瀬戸・美濃	布掘り 覆土中	70% 19世紀以降	
11	磁器	碗	—	(3.8)	[4.4]	緻密 灰白	染付 くらわんか 外面草花文 高台脇二重圈線	透明釉	肥前	布掘り 覆土上層	5% 18～19世紀	
12	磁器	段重	10.6	6.6	10.2	緻密 灰白	染付 縁内無釉 外面椿文と帶線文	透明釉	在地	布掘り 覆土中	60% 1870年代以降	
番号	器種	上径	高さ	下径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考		
13	竈鍔	[33.8]	4.2	[30.8]	(79.57)	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	外・内面ナデ 煤付着	P 3 覆土中			
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
14	硯	(12.9)	6.6	2.1	(2026)	凝灰岩	長方硯 海部欠損 丘部摩耗			盛土		
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考		
15	半錢硬貨	2.22	—	0.11	3.31	銅	1873 年	明治十年		盛土		
番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考		
16	軒丸瓦	14.6	(1.9)	2.2	(229.5)	長石・石英	灰	左巻三つ巴 連珠 14		盛土		

第3号礎石建物跡 (第 15・16 図 PL 3・4)

位置 調査区中央部の A 2 i2 ~ B 2 a4 区, 標高 6 m ほどの第 1 号水塚の頂部南西に位置している。

重複関係 第 2 号礎石建物に掘り込まれている。

規模と構造 桁行 2 間半, 梁行 2 間の側柱建物で, 東面南側に桁行 1 間半, 梁行半間の庇が付設されていた。桁行方向は N - 37° - E の南北棟で, 桁行は 6.82 m, 梁行 4.98 m で, 面積は 33.96 m², 平面形は長方形である。柱間寸法は桁行が 1.20m (4 尺), 梁行が 0.90m (3 尺) を基本とし, 柱筋は P 1 ~ P 3 がやや西側に寄っているものの, それ以外は概ね揃っている。

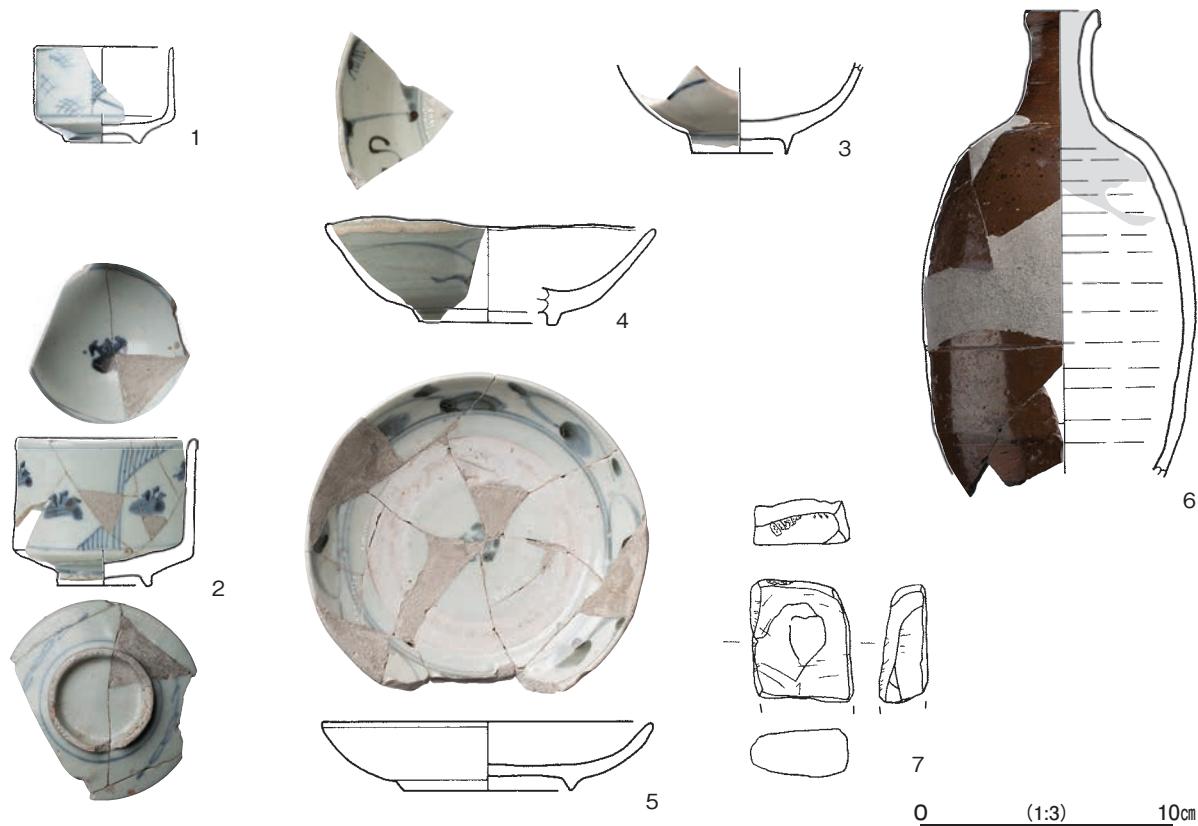


第15図 第3号礎石建物跡実測図

基礎地業 24か所。建物の桁行方向と梁行方向に布掘りした礎石列3か所を確認した。いずれも平面形は隅丸長方形で、掘方の断面は逆台形である。桁行方向の長さは長軸6.02m、短軸0.25～0.45m、深さ0.20～0.28mで、礎石は確認できなかった。梁行方向の北面は第2号礎石建物に掘り込まれ、確認できた長さは長軸4.48m、短軸0.34m、深さ20～28cmで、礎石は確認できず、据付穴P11～P15を確認した。南面の長さは長軸4.58m、短軸0.23～0.32m、深さ16cmで、礎石は確認できず、据付穴P10・P16・P18～P20を確認した。このほかに建物跡北東部にP1、中央部にP2・P3・P7～P9・P21、南部にP4～P6、南東部にP17を確認した。平面形はP1・P4・P5・P7・P9・P18・P19・P21が橢円形、P2・P3・P6・P10・P17が円形、P20が隅丸方形である。P8は北側の一部が第2号竪穴建物に掘り込まれているが、不整橢円形と推測される。P15は円形と推測される。P11～P14は不明である。P1～P21は深さ10～45cmで、掘方の断面はいずれもU字形である。埋土は、P1～P11・P16～P18・P21は黒褐色と暗褐色の粘質土を突き固めて貝殻を互層に充填して地業している。P12～P15は単一層である。P11～P15の最上層は根石が据えられていたものと推測される。P19・P20は不明である。

遺物出土状況 土師質土器片20点（鍋19、不明1）、陶器片22点（小皿1、鉢1、擂鉢2、壺6、瓶2、徳利9、袋物1）、磁器片74点（小壺1、小碗40、中碗5、碗1、小皿2、猪口12、瓶9、徳利4）、石器2点（砥石）、貝殻9点（ヤマトシジミ2、ハマグリ7）、縄文土器片5点（深鉢）が出土している。1は北部、2と6は南部の布掘りの覆土中層から出土している。

所見 建物が築造された時期は、出土した陶磁器から19世紀前半に比定できる。遺構の性格は不明であるが、第2号礎石建物跡と重複することから母屋であると推測される。礎石は確認できなかったが、第2号礎石建物跡との関係から当遺構の礎石が転用されたものと考えられる。また、第1号水塚から出土した磁器と類似品が出土していることから、同時期に構築されたものと推測される。



第16図 第3号礎石建物跡出土遺物実測図

第5表 第3号礎石建物跡出土遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
1	磁器	小碗	[5.4]	3.8	2.9	緻密 灰白	染付 筒形 外面菊花文と斜格子文 底部二重圏線	透明釉	在地	布掘り 覆土中層	60%
2	磁器	小碗	7.2	5.7	3.8	緻密 明オリーブ灰	染付 筒形 外面格子文と桐散文。底部 一重圏線と雨竜文 見込一重圏線と五弁花文	透明釉	肥前	布掘り 覆土中層	70% 1700年代～1810年代
3	磁器	碗	—	(3.1)	[3.9]	緻密 灰白	染付 丸形 外面草文。高台脇二重 圏線	透明釉	肥前	布掘り 覆土中	15% 18世紀以降
4	磁器	小皿	[6.5]	3.8	[2.7]	緻密 灰白	染付 輪花形 外・内面草文。	透明釉	在地	布掘り 覆土中	10% 19世紀以降
5	磁器	小皿	13.0	2.7	6.6	緻密 灰白	染付 内面唐草文 見込五弁花文と 二重圏線 蛇の目釉剥ぎ	透明釉	肥前	P 1 覆土中	90% 1720年代～1770年代
6	陶器	徳利	2.8	(18.5)	—	長石・石英・黒色粒子 灰白	五合徳利	鉄釉	不明	布掘り 覆土中層	50%

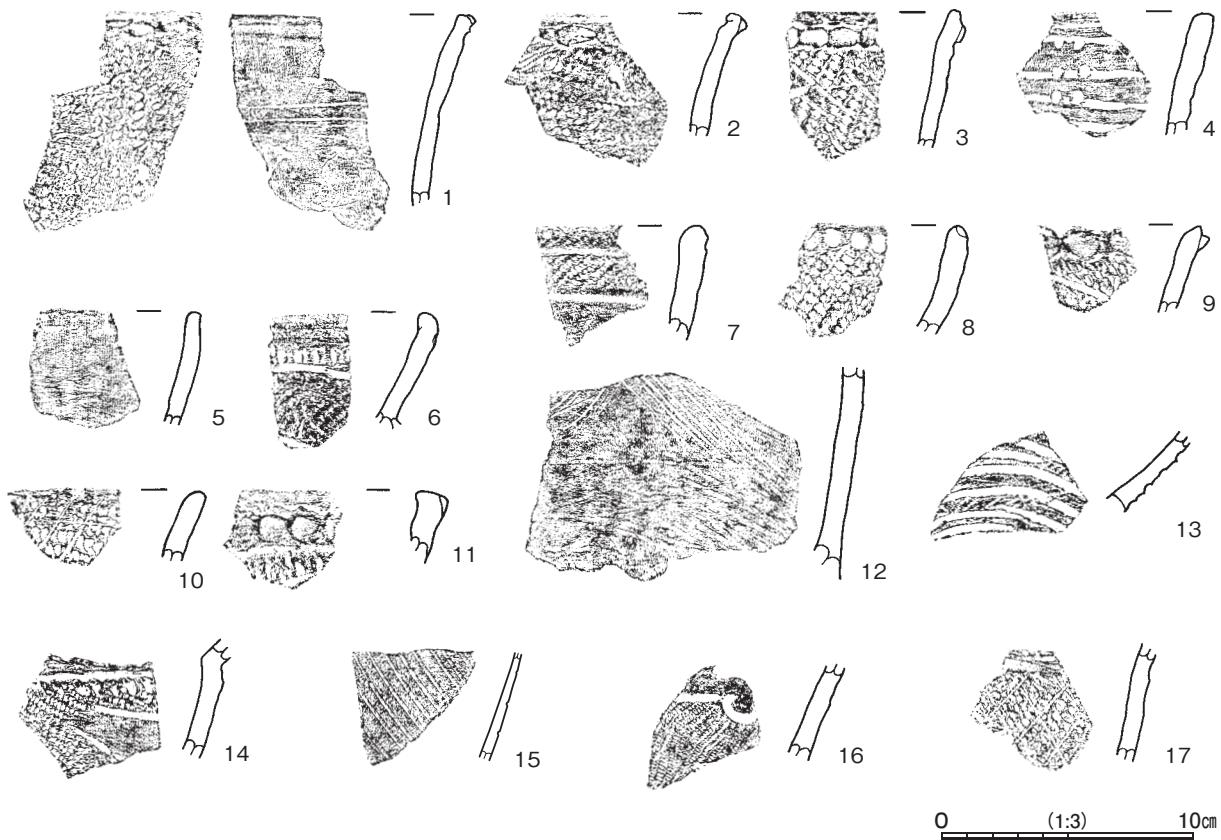
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	砥石	(4.8)	4.1	1.9	(56.0)	凝灰岩	砥面3面	布掘り 覆土中	

第6表 江戸時代礎石建物跡一覧

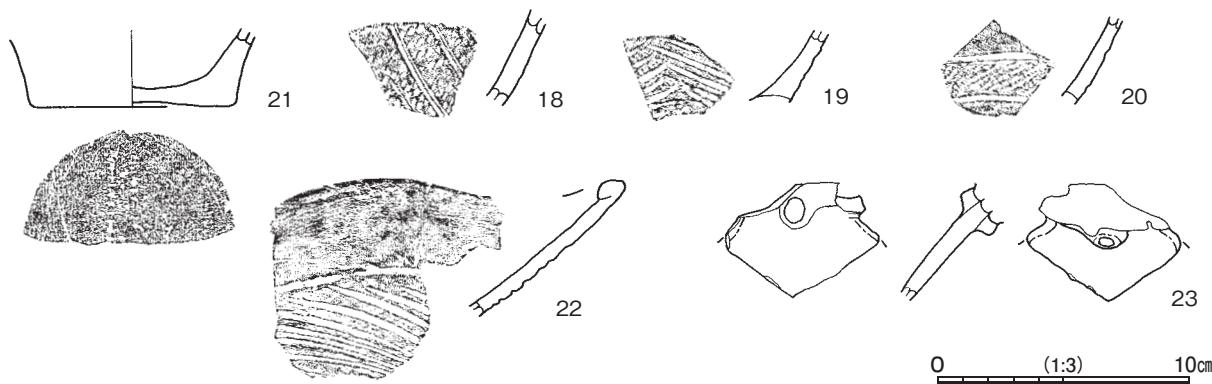
番号	位置	桁行方向	柱間数 桁 × 梁 (間)	規模 桁 × 梁 (m)	面積 (m ²)	柱間寸法		基礎地業			主な出土遺物	時 期	備 考	
						桁間(m)	梁間(m)	礎石数	柱穴数	布掘り数	深さ(cm)			
1	A 2h4 ～A 2d5	N - 40° - E	—	6.28 × 4.58	28.76	—	—	2	2	4	48～75	土師質土器、 陶器、磁器	19世紀後半	
2	A 2d3 ～B 2a3	N - 43° - E	3.5 × 2	7.97 × 5.22	41.60	0.9	0.95	—	5	4	21～43	土師質土器、 陶器、磁器	19世紀後半	
3	A 2d2 ～B 2a4	N - 37° - E	2.5 × 2	6.82 × 4.98	33.96	1.2	0.9	—	21	3	10～45	土師質土器、 陶器、磁器	19世紀前半	

(2) その他の時代の遺物

第1・2号礎石建物跡から出土した縄文時代の遺物について、実測図及び遺物一覧を掲載する。



第17図 その他の時代の遺物実測図(1)



第18図 その他の時代の遺物実測図(2)

第7表 その他の時代の遺物一覧

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	—	(7.6)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口唇部ナデ 単節縄文LR(斜) 内面横位の条線	SB 1	
2	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口唇部ナデ 単節縄文RL(横) 内面磨き	SB 1	
3	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部指頭による圧痕文 単節縄文LR(横) 内面磨き	SB 1	
4	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部磨き 沈線文 刺突文 内面磨き	SB 1	
5	縄文土器	深鉢	—	(4.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部磨き 無文 内面磨き	SB 1	5%
6	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	褐灰	普通	押引文 沈線文 内面磨き 口唇部ナデ 沈線文 単節縄文LR(横)	SB 1	5%
7	縄文土器	深鉢	—	(4.5)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	沈線文 単節縄文LR(横) 内面磨き	SB 1	
8	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐	普通	口縁部圧痕文 単節縄文LR(横)	SB 1	
9	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	長石・石英・雲母	暗赤褐	普通	口縁部指頭による圧痕文 沈線文 内面磨き	SB 1	5%
10	縄文土器	深鉢	—	(2.7)	—	長石・石英	橙	普通	横位と斜位の沈線 単節縄文LR(縦)	SB 1	5%
11	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部指頭による圧痕文 内面磨き	SB 1	5%
12	縄文土器	深鉢	—	(8.1)	—	長石・石英・雲母	赤黒	普通	条線文 外・内面磨き	SB 1	
13	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	横位の沈線	SB 1	5%
14	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	刺突文 沈線文 単節縄文LR(縦)	SB 1	
15	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐	普通	斜位に条線 内面ナデ	SB 1	
16	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	長石・石英・雲母	灰黃褐	普通	沈線文 単節縄文LR(横)	SB 1	5%
17	縄文土器	深鉢	—	(4.7)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	格子状の沈線 単節縄文LR(横)	SB 1	5%
18	縄文土器	深鉢	—	(3.7)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	沈線文 単節縄文LR(横)	SB 1	
19	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	長石・石英	暗赤褐	普通	斜めに沈線 内面磨き	SB 1	
20	縄文土器	深鉢	—	(3.5)	—	雲母	褐灰	普通	単節縄文LR(横) 横位の沈線	SB 2	
21	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	[8.2]	長石・石英・雲母	灰褐	普通	底部網代痕の後ナデ 内面磨き	SB 1	10%
22	縄文土器	浅鉢	[17.4]	(5.3)	—	長石・石英・雲母	黒	普通	波状口縁 口縁部磨き 沈線文 内面磨き 外・内面黒色処理	SB 1	20%
23	縄文土器	浅鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	外・内面に貼瘤 無文部磨き	SB 2	

第4節 総括

1 はじめに

米田水塚群第1号塚は、平成29年度に調査を行い、江戸時代の水塚1基と礎石建物跡3棟を確認した。今回の調査により、江戸時代後期から明治時代にかけての当地域に暮らす人々の水害対策の一端をうかがい知ることができた。本節では、当水塚における遺構及び遺物についてまとめるとともに、周辺の水塚の分布状況や築造された時期について若干の考察を加え、総括とする。

2 水塚について

(1) 磁石建物跡について

磁石建物跡 3 棟を確認した。第 1 号磁石建物跡は第 1 号水塚の塚頂部北東に位置する。本文の所見で述べたように、家主への聞き取り調査から、水屋として使用され、穀物等を貯蔵していたとされる。また、第 1 号磁石建物跡の間知石下の礫敷き上部と第 2・3 号磁石建物跡の布掘り状に地業した上部がほぼ同じ高さであることから、同時期に第 1・3 号磁石建物の基礎部を地業したと考えられる。水屋として建てられた第 1 号磁石建物跡は、整地層を約 15 cm 盛土し間知石を据えていることから、瓦屋根の重量のある上屋であったことが推測できる。

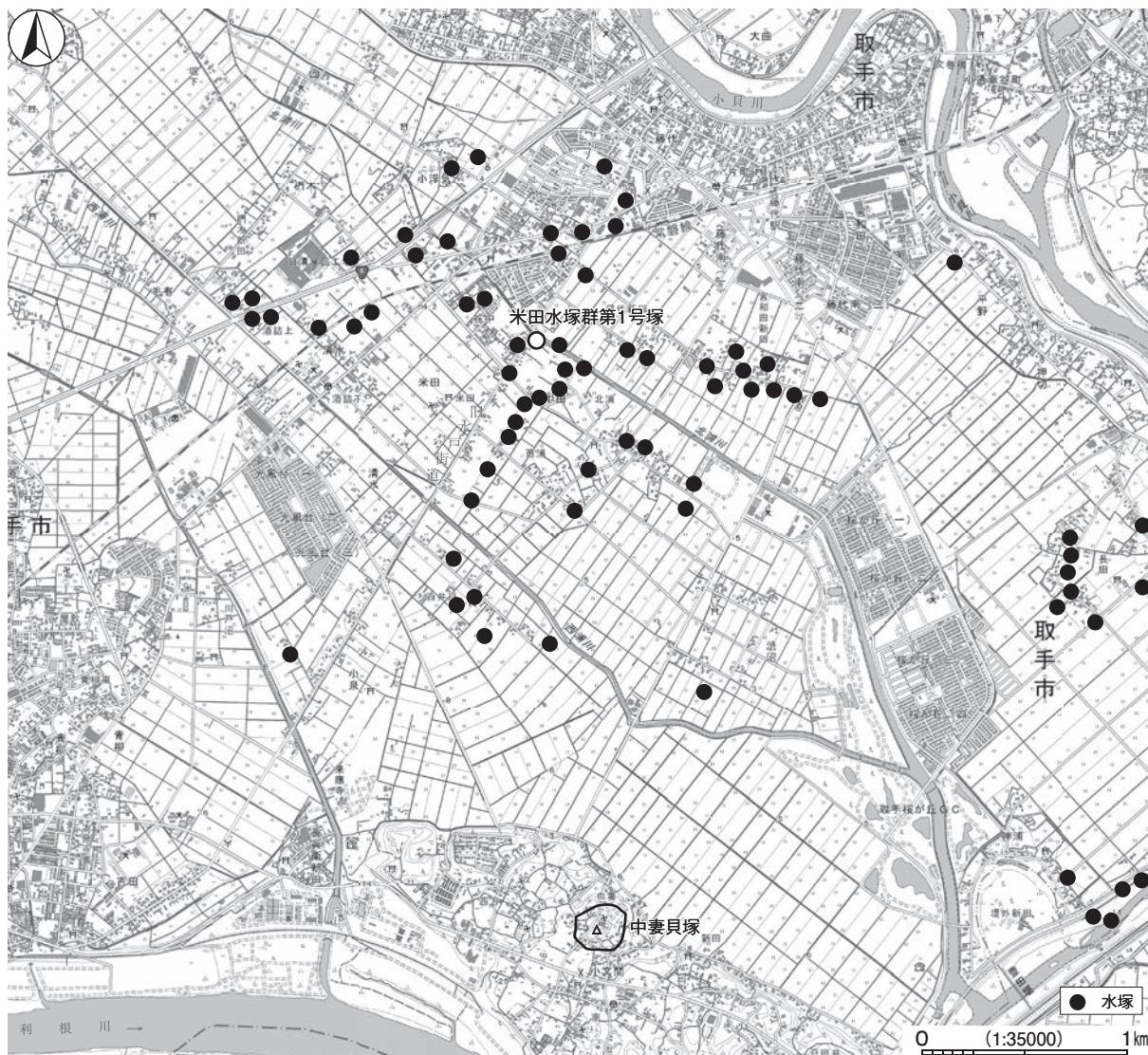
第 2・3 号磁石建物跡は第 1 号水塚の塚頂部南西に位置し、第 3 号磁石建物を取り壊して第 2 号磁石建物に建て替えられたと考えられる。第 2 号磁石建物跡の基礎地業に据え付けられていた根石として第 3 号磁石建物跡の根石を転用したため、第 3 号磁石建物跡では磁石や根石が確認されなかったものと推測される。第 2 号磁石建物跡は本文の所見で述べたように、家主への聞き取り調査から、母屋として使用され、敷地内にある新宅を建てる際に取り壊されている。

3 棟の磁石建物の基礎部の地業で使用されていた貝殻については、当水塚も含む六郷地区の水塚で使用した土壤が小文間台地の貝塚から貝を含む土を運んだものであると藤代町史に記されている¹⁾。当台地には西方貝塚と中妻貝塚が存在しており、当水塚から出土した縄文土器は縄文時代後・晩期のもので、当水塚から約 3 km 南に所在する中妻貝塚から出土している縄文土器の様相と類似している²⁾。よって、当水塚の基礎部には中妻貝塚の貝を使用したものと推測できる。

(2) 分布状況及び築造時期について

米田水塚群は第 1～3 号塚が確認されている。第 1 号塚は調査開始時には塚のみ現存していたが、平成 29 年までは水屋が遺存しており、塚の周囲には生垣が植えられていた。第 2 号塚は塚のみが遺存し、第 3 号塚は水屋が現存している。茨城県遺跡地図³⁾に登録されている取手市域の水塚は、当水塚群 3 基のみであるが、第 19 図を見ると、利根川と小貝川に挟まれた地域に数か所にまとまって分布していることがわかる。昭和 61 年に水塚の分布調査が行われ、当水塚群が位置する六郷地区は 46 基の水塚が確認されている⁴⁾。当地区は、昔から小貝川の氾濫による水害に遭っていた地域である。その氾濫原を利用して水田地帯となり、室町時代末期から江戸時代初期にかけて定住集落が形成されるようになった。前期になると取手宿と藤代宿を結ぶ旧水戸街道が整備され、現在に至る集落が形成された。水塚の分布は、旧街道が整備された当時の村域に集中しており、周間に高い土地がなかったため、水害対策として土盛りして水塚を築いたとされる⁵⁾。近年では、宅地造成や土地改良整備、さらに水害対策事業の推進により浸水被害が減少したこと、水塚の数は減少傾向にある。

築造された時期については、当地区の集落が形成された江戸時代と推定される。詳細な年は不明であるが、当地区内に「天保三年辰三月建之」と記された水屋がある⁶⁾ことから、当水塚も 1832 年前後の江戸時代後期に築造されたものと推定される。さらに、藤代町史の当地区の江戸時代の商工業に関する内容に、「弘化 3 年（1846）好蔵は瓦屋を始め、瓦職人を置き…嘉永 4 年（1851）には「冥加」として並平瓦 300 枚を上納するまでになり…その後は営業ふるわず、文久 2 年（1862）には生産をやめ、慶応元年（1865）に廃業している。」⁷⁾と記された資料があり、当時、多くの水屋で瓦屋根が必要であった時期と推測すると江戸時代後期以降に築造された可能性が考えられる。



第19図 取手市東部水塚分布図（藤代町史 民家編「藤代町民家・水塚分布図」改編）

3 おわりに

米田水塚群第1号塚は、小貝川・利根川流域に位置する水塚群の一つである。洪水の多い沖積低地のため、河川が氾濫するたびにこの地の人々は河川の改修や堤防を築くなどの治水対策に取り組んできており、水塚もその一つである。時代を経て水塚は、老朽化や宅地開発などの理由で取り壊される状況にある。当地域の人々がこれまで取り組んできた治水対策の変遷について解明できるよう、今後も水塚に関する資料が増加することを期待したい。

註

- 1) 藤代町史編さん委員会『藤代町史 民家編』藤代町 1987年3月
- 2) 西本豊弘・松村博文・小川和博・徳永園子・樋泉岳二・宮内良隆『茨城県取手市中妻貝塚発掘調査報告書』取手市教育委員会 1995年7月
- 3) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 4) 註1) と同じ
- 5) 取手市史編さん委員会『取手市史 民家編』取手市 1980年10月
- 6) 註1) と同じ
- 7) 藤代町史編さん委員会『藤代町史 通史編』藤代町 1990年3月

写 真 図 版



調査区遠景（北東から）



第1号水塚全景（1）



第1号水塚全景（2）



第1号水塚 土層断面（1）



第1号水塚 土層断面（2）



第1号水塚 石段

PL2



第1号礎石建物跡



第1号礎石建物跡 遺物出土状況（1）



第1号礎石建物跡 遺物出土状況（2）



第1号礎石建物跡 遺物出土状況（3）



第1号礎石建物跡 土層断面



第2・3号礎石建物跡



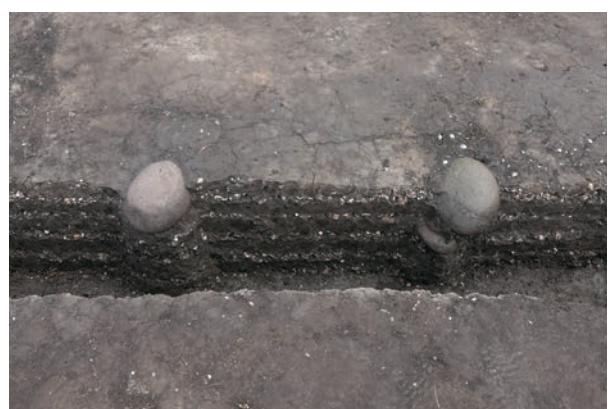
第2号礎石建物跡 遺物出土状況（1）



第2号礎石建物跡 遺物出土状況（2）



第2号礎石建物跡 埋甕出土状況



第2号礎石建物跡 土層断面



第1号水塚出土遺物



第1～3号礎石建物跡出土遺物

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 10 Pro
編集 Adobe InDesign CC 2020
図版作成 Adobe Illustrator CC 2020
写真調整 Adobe Photoshop CC 2020
Scanning EPSON DS-G20000
使用Font OpenType リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold
見出ミンMA31 Pro, 太ミンA101 Pro Bold
中ゴシックBBB Pro Medium
写 真 線数 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CC 2020でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第455集

取手市

米田水塚群第1号塚

一級河川北浦川河川改修事業
地内埋蔵文化財調査報告書

令和3（2021）年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433-33
TEL 029-252-8481